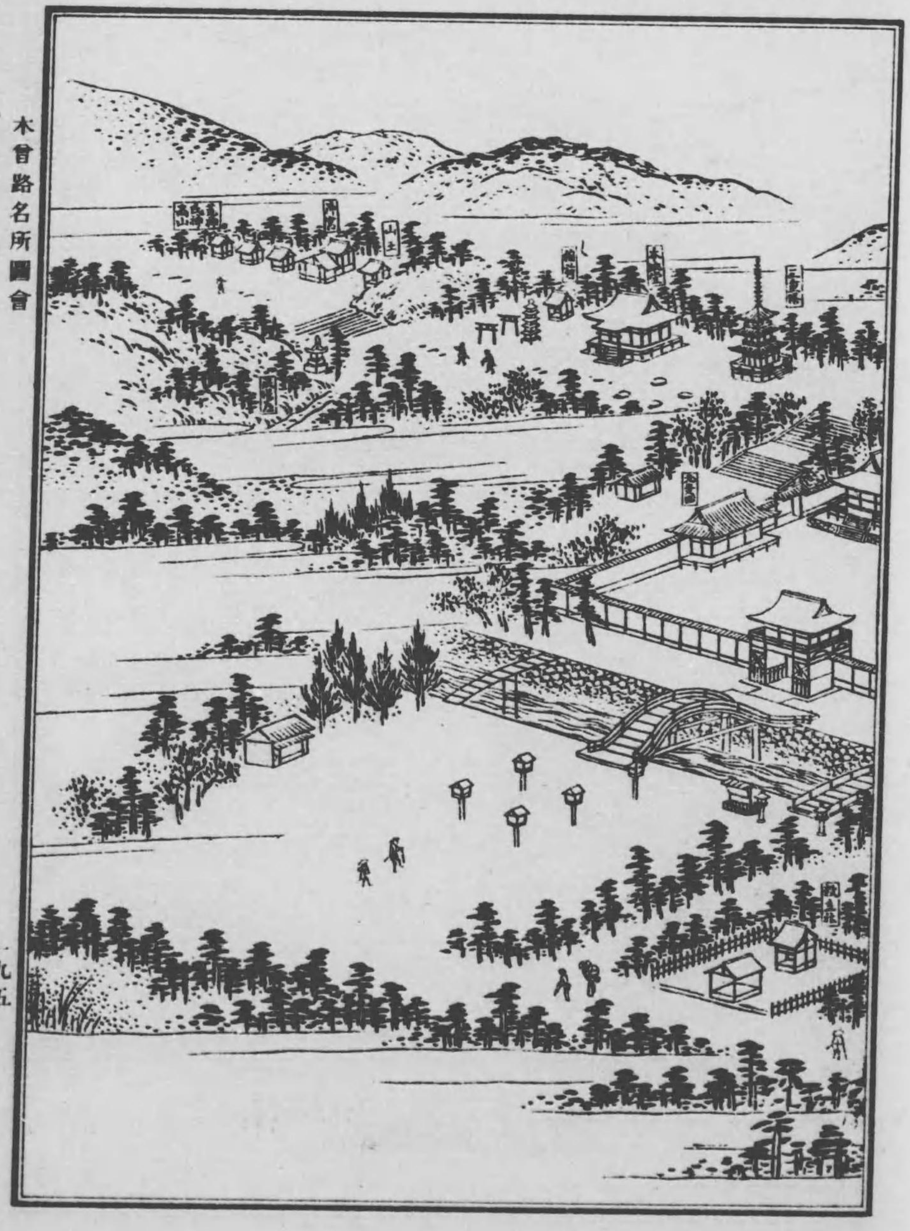
南宮金山彦神社



天満宮　社頭ふあり

七之宮　大門通本あり　明神山王と称す　宮の入口ふあり

十王堂

地蔵堂　日所よ

大領神社　日村の内ふあり式内なり　本神伊奘冊尊　速玉男尊　事解男

国府宮　日郡府中村ふなり　本神金山彦神　埴山姫命　豊玉姫尊

首の社　日郡荒尾村南宮より六十町あり　平将門の霊ふあり　宮生洞とも云ふ　将門塚　諏訪明神　秀郷　其首と得て入洗れ給る所　其首ふのれる　獄門をぬけて関ふへ飛ばんとする時　諸社の年人の神夫と称て村民　其首ふ取ふ夫の通りたる所を夫通村と云ふ世人首の法師と　為ふ者之種ふれたる霊跡あり

神木白玉椿　神社に

南宮十首

色久ぬきて玉椿みのゝふ神や八千代ろ千ちとう久ゝ年　従二位行社　利綱

鐘　高サ八尺三寸　直三尺三寸　雲サ三寸六分無銘　毛井駅の南　奥の中　盆地ろ当る　竜宮ろ上ろ

彩花遺

美濃山の白玉椿ろ豊の明ふあひそめけん

狛犬　境門ニ居ル　佛ニユ春日の作

石鳥居額　正一位中山金山彦太神と書ル　一品圓智親王の御筆

鐵塔　塔の南ニ有リ　南蛮鐵ニテ造リ　高サ五尺六寸七分　上ノ重ノ二尺寸法　上ノ重ノ三尺二寸　時日アリ　光字アリ

下ノ段ノ三尺二寸　上ハ菩薩六躰　下ハ四天王ノ像アリ

如法經ヒ書写シ此塔中ニ納ム事アリ　永正年中迄ハ之其後中絶

古鐘ハ鎌倉御代二位尼建立　其時奉行ヘト云

銘　平氏能登入道沙弥淨普

平氏左京亮氏仲

土岐美濃守源朝臣法名常保

土岐刑部少輔源朝臣頼世

右兵衛太夫秀行

藤原敬位秀頸

新銘　是ハ應永年中再建修補ノ大檀越　右兵衛太夫秀行其興之時奉行トヨセ

法名真蓮

源盛光　沙弥道順

勸進聖　沙弥淨阿弥

沙弥妙全

大工　河内國高大路家久

應永五年戊寅八月十日　敬白

空也上人和歌碑　教主の社の境内ニ有リ　謂ハ一遍上人遊行の時詠ジ給フ所ニ　空也上人ハ南無阿弥陀佛南無阿弥陀佛

時雨ハ降ル　時雨ハ降ル　我ハ降ル　我ハ降ル

此碑ハ文政年中建ル　文政戊寅ノ秋　一遍上人ハ訂國時ニ　二年ノ月日遊行者二世真教上人ニ授ケ　五重石塔婆　塔の南ニあり　銘曰　一切最經　制轉供養也　文明己亥　比丘妙先　拜首

○年中行事　神事祭禮

元朝　大宮諏訪社ノ上列　御戸開　儀式有之

月　幸地蔵　御戸開　并二朝之間修二会

日　大宮振社御節會神事
正月十七日　歩射神事
二月八日　牛王供
三月三日　二宮三宮神輿并後の殿　内馬場渡御　并後三殿の神主
五月五日　大宮二宮三宮神輿御祓　諸國廚宮神事
六月廿一日　御田植
日　此日　夏越祓
七月朔日より一七日　本地堂小於く法華讀經
日　七日　大宮并本地堂開扉寶物出拝
八月十五日　秋山神主神前左右以芝飾山移明月献神供
十一月上申日　御鎮座祭祀
日　時日　大宮開扉法華會
十二月廿七日　御煤掃之神事

正五九月十五日　大般若經奉讀千度　神樂
日　十一日　本地堂護摩堂修法
日　十七日　宗源三壇修行
正四八十月　毎十一日より十四日迄三座宛寺官勤行
十一日　奉獻千度神樂修行

神事祭禮神供調進魚鳥獻之

其外月次神事畧之

神社考云
南宮山神者天武天皇白鳳之初所建祭也其華表題曰正一位勲一等金山彦大神。金山彦者何神余答曰日本紀神代卷所謂伊弉冊尊將生火神悶熱懊惱而吐即化為神鵭之金山彦是也此神於五行為金神於是乎其人又言曰初美濃國不破郡府中祭之後移于郡之南仲山故鵭

南宮
祭禮列式

南宮祭祀供魚鳥凡産于美濃者必以南宮為氏神云余復告曰天武天皇自吉野經伊勢入美濃塞不破關遂擊大友皇子蓋於此時有所祈美濃中山而後建神祠耶其人答曰彼社家者亦云余復詰問之答曰朝敵平將門頸傳言飛入洛時神放矢射其頭今俗稱箭路御首宮者是其縁也

住吉明連。天慶三年正月於美濃山南神宮寺修四天王法降將門二月十三日午時赤雲自東來入爐壇須臾臭氣盈場十四日將門伏誅

夫當社號南宮也稱也付事を糧大南方を司る故ふかく弾あるべ

陽神ふかく文武兼備ふ故ふ國家崇敬成る世の驚擾乃附を帯あり事あるごとに祭長の乳母を祝族安國寺こ小陣し此度を蔵拂ひ乃付其后　大獻院公の御附今れぬく速く再営あるべ

玲瓏たる社頭例祭ま三月三日神輿渡御又五月五日ま府中村の御旅所ふ行こう六月廿一日御田植乃神事又十一月初申日の神事

ふ神供ふ奥牧成用也又当社の神窶ふ大徹冠鎌の図れあり其形行孫の陰れでこ當宮いふ〜へ今の姫乃所ふ本社あり寛永以来山下に遷座ある本社の本あ弱殿ふ破奉殿楼門左右ふ智長石反搖拝殿神樂殿御供所神庫神輿舎社僧集會所社人十二人社僧十二坊其外生古の面々近隣ふ多〜陰晴成難乃為〜

菊川記

五日の申乃時ふ御ふ拝乃前ふ出乃人ふ出る事宮の事ふ〜見物出

[illegible]

昔のめぐみ[illegible]ば此所ハ遊女などいるべし又新ふあや老[illegible]

幸[illegible]小をゝ[illegible]ざわ[illegible]

我宿の[illegible]の菖蒲草こゝひろ[illegible]小片蔭の家　兼良公

養老瀧

萬葉　従古人之言来流老人之変若　大伴宿祢東人作歌

同　田跡河之瀧乎清美香従古宮　大伴宿祢家持作歌

仕兼多藝乃野之上尓

續日本紀　元正天皇　平城宮　養老元年九月行幸同

二年二月再行幸従五位下多治比真人

廣足遣美濃國造行宮

同　同九月天皇行幸美濃國有當者郡多度

山美泉戊午賜従駕全典已上及美濃國

司笠麻呂朝臣也

[illegible]川記　わゝ[illegible]

乳母　名も老ぬ[illegible]

千歳　[illegible]

一説基政　風早実験　花ノ御所　玄覽

養老社

[illegible]

元正御極、王道平平、閭民疾苦、閭物則天

當者之秘、多度之山、天降嘉瑞、地出奇泉、

清潔可食、養而不窮、人受其福、王明之功、

一飲一浴、不老不死、衰者再盛、癃者可起、

有本如是、萬古泥泥、君子是取、鑒戒堪存

陵谷變遷、湮晦是懼、於是建碑、以識其所、

乾隆五十年歲次乙巳正月吉旦　吳超程赤城書

乾隆五十年者當日本天明五年也

それ式部布[illegible]

幸[illegible]記小[illegible]四道[illegible]岳野の南宮を去[illegible]幸二里許ゆて一邪

山上養老瀑布

多度山
養老
天神
養老寺

會の地あり。こゝ終を高岡しらふ山路ふもとくだれば養老亭
てゝ所あり。て山間水風流の樓を建く其侍ふ浴室ありて入湯の
人書老水浴あり。こゝに浴し老翁面りうの湯をわきこゝに浴
する時ふ女婦出く筝弦弾ぜ三弦を唱ひ裏弦伴ぜそ絃ゝり
書老の祠あり。こゝ酒ゝひ。て渓河を越石を伝ひ険岨
登こゝ瀧を見る。其書遠近ふあゞれく張望こゝ山を高度山
ゝひ瀧の源を田孫川と云又瀧のわゝに信夫石ゝて名石
出る石面ふ埃衣苔の接所あり又根芋山不の名産く他境ふ勝れ
て香強し真ふ花帯文ゞ瀧の詩ふ自牡鹿を下りく飲ゝひ
もこゝ終ゝあや比せん名ゝ山ゝ
美濃御山 玉野のあれ南宮山ゝ
新古本 山上ふ一つれあり
ありひ出やこの木曾の初ゝれ松 浮勢
新拾遺 いとゝしみのあや万のあゝふ万ゝれふそゝ 遠山院

續後撰　いにしへ天法の御世の岩根松猶ふりまさる千とせをかへん　知家
新後撰　恵しめるみの御代のつきなくも引てし人の跡をたづねん　遊義門院人麿
同　むかしをぞ思ひ出ける此山の麓の方の松を　西家
後千載　ちはやぶる天法の御山の麓の方の松を　西氏
續後拾　色うつる御代の御世の松なれば千とせをふるの関の藤川　後西園寺入道
文本　わかそでの天の御山の麓にて裏うれ緑もをしの唐ろ　九条内大臣
同　手にのきぬれば天法の御山の麓の松ひとつの高くそそ　西永
現在　古の御代をかけて世をうつす天法の御山の麓の松を　徳雲法師
宗集　あ蓋のうれのたかくるを玉章にこそ御山の神やいさむる　雪方
新撰菟玖波　みの山のくもわの松の葉にそ〜もうの杜風を吹　成茂
同　天法山に志ゆきてとくるる玉神の豊のひろ小章を踏しれ　景正
宗集　敷るゆこの御山の御代の松ひとうえてとうしやあるん　兼好
本家十三代集　家世ゆむ志久と今も新むるこの御山の松のみとを紙　赤蜂外平常猛

太平記十五　敷るゆこの天法の御山の夕時雨はれぬる松をふるひとりあり　後醍醐天皇神の宮
元和の比しのふまゐりて　世をよしとるとおもふ御山の法をこそ天法の御山の松をふるひとりあり　土御門宮内卿
金蓮寺　垂井宿の南三町所詳竹林の内ふあり時宗藤沢清浄光寺の末寺
開基一遍上人十六世遊行上人慧和尚　寺領三十五石
春王丸牌　足利持氏の子法名善門法師　法名獅門孫陀佛
辭世　よ絶てこの世思ふ事なくもあるも世くまの糸の乱れ清法　春王丸
同　相川や裾広の御小童やそ人　安王丸
春王安王の墓　永享十年二月十七日氏の興顔を潤す　安王丸
〜土人此墓ふ祈まの故其報恩のため光ふ戒師と成てこふ墓
金蓮寺ゆて年の時間　おのく父母
古の名残ふ偽海乃うゝ光〜や神の御代あれをは
雅こゝ〜ん後の世紙子ん多給人や上人よ
日目上人茶毘塚　垂井の駅民家の小七方ふあり上人の奥列
田の尾にして新田門冥樂蓮義場と号ん純宗

日蓮上人の書る[illegible]老婆の中 日蓮上人の書る[illegible]
日蓮上人ほとゝぎす 後弦別大石寺より[illegible]日蓮風呂の迷信に紀せ
[illegible]肉ふ柔風を [illegible]別 [illegible]有る日蓮 兩人を奥して上[illegible]
[illegible]を [illegible]ふ [illegible]ふ [illegible]れて日 [illegible]を 乾
[illegible]を遠 [illegible]て 二年十一月十八日辛 七十に [illegible]
地に [illegible]れ日 [illegible]の [illegible]華 [illegible]陽と [illegible]
山に [illegible]め 迷 [illegible]ふ [illegible]
要法寺 [illegible]
あり [illegible]和三年の [illegible]

相川 [illegible]川と書て [illegible]
[illegible]川大石川 [illegible]川とかゝれ [illegible]
入く [illegible]
素名は [illegible]

[illegible]士紀行

未[illegible]藍川の [illegible]

喪山 [illegible]の左の本名 [illegible]
[illegible]の遊 [illegible]
神代卷云 所[illegible]臥 喪屋 此 即落而為山 今在美濃國
藍見川之上 喪山是也 世人惡以生誤
死此其緣也 藍見川ハ相川の
青野原 [illegible]にあり [illegible]
[illegible]三 [illegible]

[illegible]の左 [illegible]
[illegible]平尾村の [illegible]

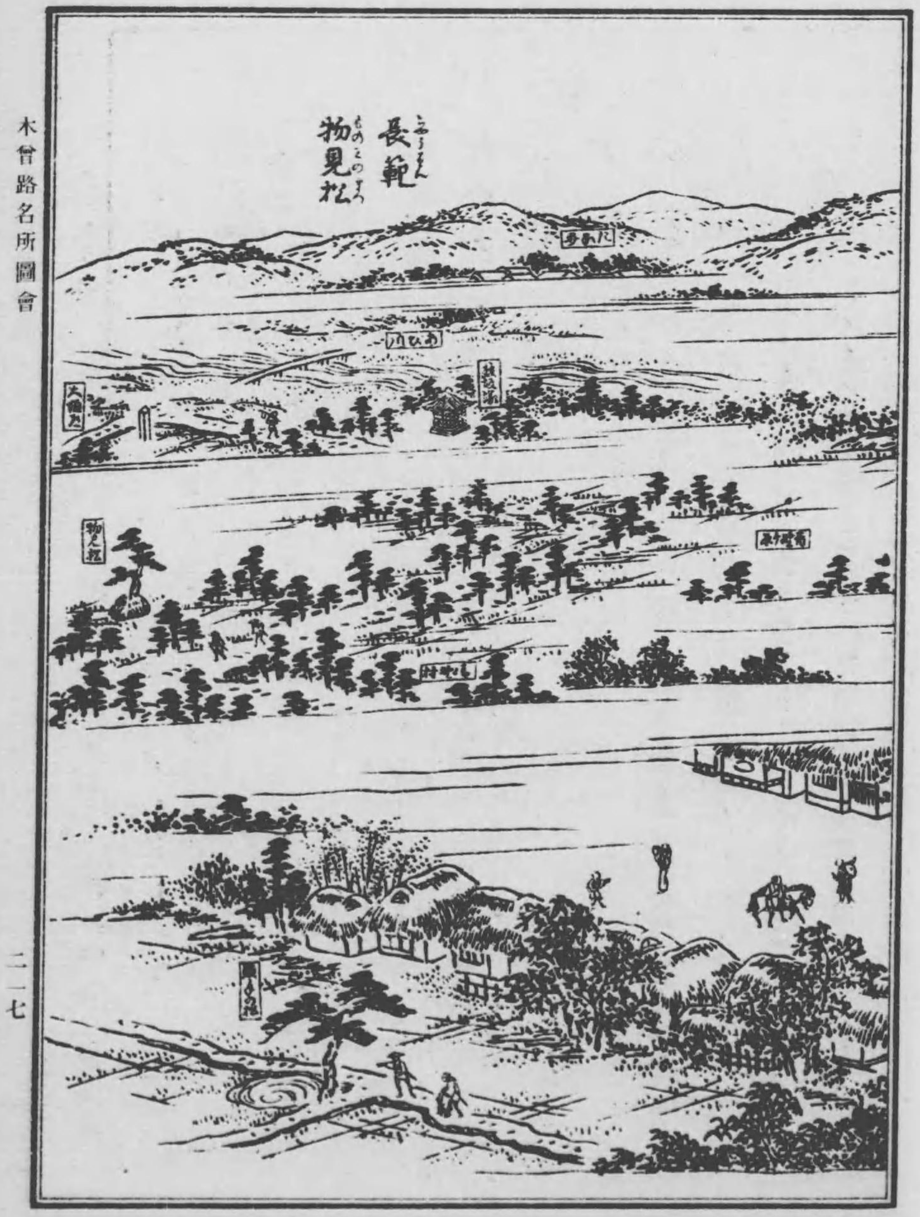
支本 [illegible]山を [illegible]

幣懸松 青[illegible]の [illegible]の方半町 詳 [illegible]
又青[illegible]の一本の松 [illegible]
傳云朱雀帝の御宇東夷平將門退治の時中山金山[illegible]を神ふ
[illegible]ひ [illegible]て幣掛松の名 [illegible]賞せ [illegible]世人 [illegible]長範と [illegible]風
賊 [illegible]ふ [illegible]んで [illegible]を集 [illegible]害を [illegible]ひ [illegible]松と [illegible]遠見せ [illegible]
土人 [illegible]見松と [illegible]古代の松 [illegible]正德年中大風 [illegible]
極絶の松 [illegible]

わる暑く吹や一下木の松 [illegible]
大切の名を [illegible]
若くて [illegible]の [illegible]見や [illegible]
若[illegible]松 [illegible]の直 [illegible]

國分寺 [illegible]村の中 [illegible]
[illegible]山と [illegible]

青墓里
朝長の墓
こゝや君
対馬達も
敷ふ内々
此夢


長範
物見松

本尊藥師佛丈六の座像行基の作 聖武帝の詔によりて建
營ありしむかしの殿を今の門とす 田野の中にあり
堂塔なれ中古廢し又信長公
の時山燹に燒亡し再建におよばず

青墓里 むかしハ驛なり今ハ小里となりぬ
青墓の長の舊跡あり

拾玉
一夜見し人の情にたちかへる心に殘る青墓の里　慈鎭

小篠竹塚 青墓の西にあり 照手といふ遊女あり 此墓なりとぞ 照手姫ハ
東海の藤澤にも舊跡あり 其外兩人ありしにや詳ならず

朝長墓 同所小圓山の麓にあり 平治物語に
見えたり後に墓所に又長者の娘の塚もあり

御勝山 青墓の東よりつゞく 慶長の役に東方の御本陣ありしゆへ
岡山といひしが此時御勝利ありしゆへ勝山と名を改めさせ
給ふ 其南に
御殿の跡あり

甲塚 晝飯村にあり
戰死の塚なりとぞ

赤坂（美濃）

美江寺まで二里八町 此宿美濃國不破郡安八郡
の郡境なり 宿内に石標あり

富士紀行
あつまの秋の頃乃赤坂よ越てもいそく旅人　堯孝

永享富士紀行
もりはまた我友さへあるにこれ赤坂を越やらふ赤坂の里　飛鳥井雅世

子安祠 赤坂宿北郷の山の麓にあり むかしハ赤坂の
長者にあり 後世ここに移れ

祭神 神功皇后 出ところ三代實録に

金生山寶光院 赤坂宿の北の山上にあり
眞言 明星輪寺と號す 十石

本尊 虚空藏菩薩 大巖の中に安置す 弘法大師の作 當山
記 卷も大師の法會料 三月十二日
鎭守御嶽權現 三月十一日當寺の書院より
見れバ風景いちじるし

寢覺里 赤坂宿の西八幡村をいふ
寢覺の床ともいふ

丈本
風の音に夢やられて見れもこそ寢覺の里に長き夜　伊勢大輔

杭瀬川 赤坂宿の東にあり 呂久川へ流れ入
下流は杭瀬川村にあり

光行紀行
くゐせ川といふ所にとまりて夜ふくるほどに立出て見れば
秋の最中に晴て川ぞひに照月の光りなど
行するうちに二千里の外の故人の心思ひ出られて旅の思ひ
いとゞあはれにおぼえて月の影に涙を袖にかく
三日杭瀬川に宿して一宵とゞく中秋三五夜の月を

赤坂
寶光院
虚空藏
本堂
八幡宮

いにしへめぐりく遠情は前途一千里の雲にさへぎられたりとある家せん
陸子に書けるはじめて也

富士紀行

しかすがに秋のすゑ葉に青しをかれて旅寝の月を見むとは
冬されて秀なるしほの名乃杭瀬川ゆくやはふらん　堯孝

藤川記

くゐ瀬川といふ所を過るとて
渡守ゆきかふ人の杭瀬川月のうきねもよるや待らん　兼良公

笠縫里　赤坂の宿の南にありは名なる三河にありと契沖の書にあり
又一説に摂津国なりといふぞ

十六夜日記

関より見えし[illegible]はるあたりより[illegible]道をいそぎて
[illegible]所にて
たび人の[illegible]のうち[illegible]の宿に[illegible]　阿仏

藤川記

あさ[illegible]の中山こえりは[illegible]の里
呂久川　呂久村にありて川上は杭瀬川といふ大野郡池田郡を経て[illegible]に流る[illegible]佐渡村より[illegible]　兼良公

後光厳院帝小島頓宮　赤坂宿より谷汲道にあり小島瑞巖寺にいる

此帝は南軍後醍醐天皇の兵に襲れ給ひて小島に隠棲まします此時足利義詮の兵威弱くして美濃国に落られし事太平記に見えたり

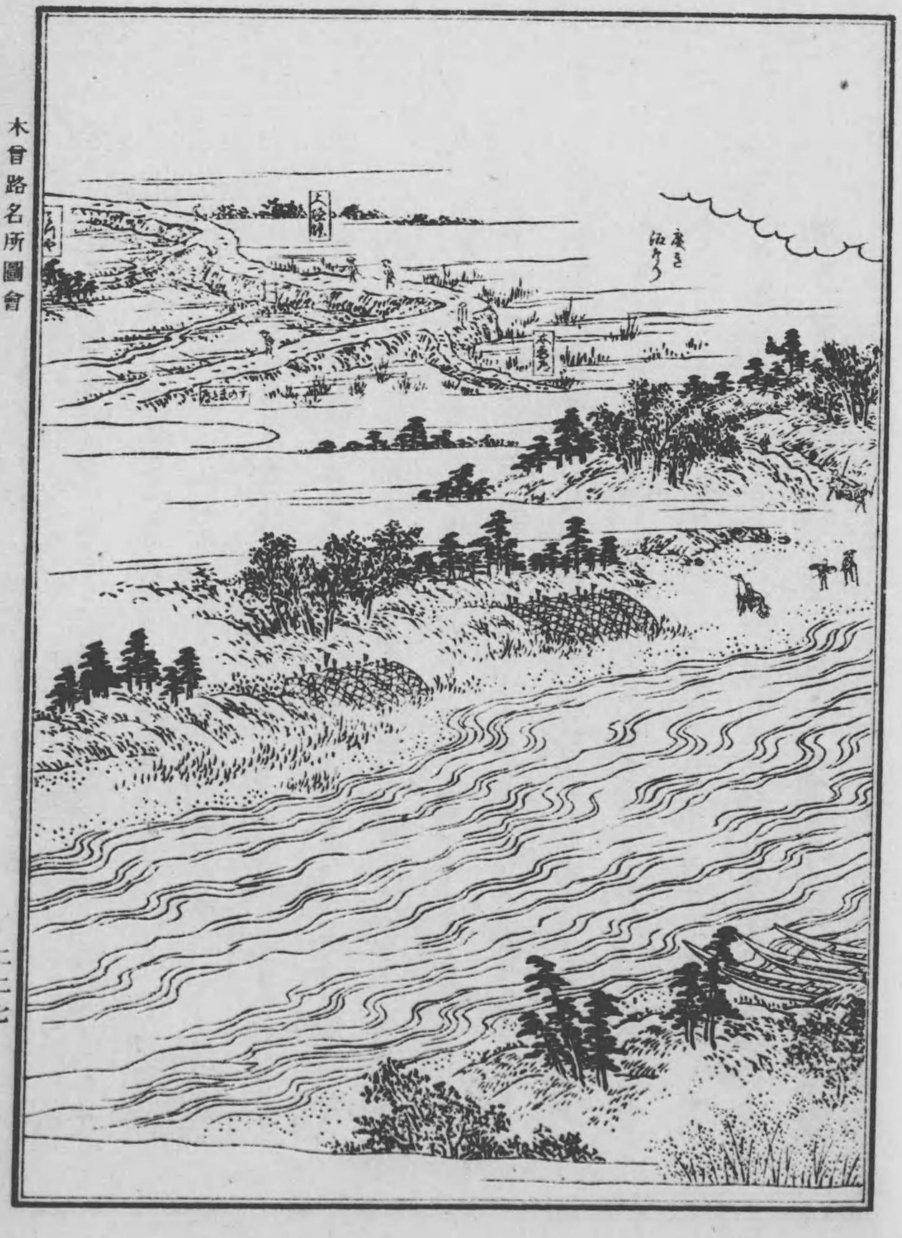
小島のすさみ　後普光園摂政良基公著述あり

小倉山の嶺の中院の庵は身のかくれ家とたのみ侍し頃[illegible]
[illegible]の[illegible]も[illegible]して[illegible]
[illegible]老の[illegible]
[illegible]
[illegible]関の東[illegible]の風[illegible]
[illegible]世[illegible]
[illegible]世の[illegible]
[illegible]の嵐[illegible]
[illegible]七月[illegible]有明の月[illegible]
[illegible]東路[illegible]
[illegible]関の[illegible]出[illegible]報國の

志なれどうるぐる神佛あんたちを弦つゞるむく巷都のひろくさあし。
今夜まづり坂本に泊らむ山法師のひじきものゆくゑの外に
すちよ給ふ茶れむしろ露らちゝはくら宵乃都むし是坊すく
けいめいせらしたぞの夜まゝかくてあくしぬよくこの日老拙らりけむて
いさつきに遥光らさん明る軒端さし出てもゝ人のあとしす侍く。
この海ゆる淡にあるうりしかど小舟乃ぐりくとする中うるゝふ乗あてれ
心地いとむくつけし。業みぞうしつでうる新山よ泊まめる名ある
あやしみれくさうぶて凡不知しかの貫之が時雨もいてく比りいひ
けるこ此よそうりやれ中るて此ろよ川都のひ出しれし
そ叡山の小原にいやゝこ色深く見えきまます志めある神の露けれ
心地まじりて思ひ清ぐろまでもおもしかゝて行かれ野路の末の案く
いかで不肖かれも奇枕して耳るのし、どまゝてよろ夜も竹のなし
露けさは花ひきとらむ人するか世路行の末もの好す

又かゞんよ小山路すゞ分まりて入中右川わらしかどりきれとおくいふ暗し
うは。ただなりぬりまてる宿
まおく此行まかりく分ゐ山のけくゝしぬ法代きちくく
人志れぬ心のうちをあしゆしもきよぶきめたくいて物まびさうや老
蘇の森よ小所名ただ。杉の梢ぞうわにくあくの本きさくに中じられ。
らすかけくるかあれ末いと見ん不知り。道よ往く行雲めれそこしかき
すべて。今宵一夜の草の枕もしづくに夜明けて年寄る尾張の出るく
此向うれさいつくゐるずけ川かれ此森乃こそりたて老いて時ふく見く
納ねど名をば何とやにも老ねずとしく此尾の小松くれらん婦つき名
所よ侍りまぬ。尾乃年の名みて待るよしおぼつ犬し。此所の中よも
心ある物のひとしにいうつびたりとも覚えけて家れすて
今はその老木も見えずなりぬ三十あまりわもすきの下陰
みどり心地おもむろしたる一夜まうでゐりは夕まはげうりふくゐし。

呂久川
杭瀬川



道のりさんすがくさまあしで月数のこゝはりうるぞやもゝ川しゝとゝとゝたて
いのまゝと神くちあしもやはし川の中をまるゝ世を流るゝん
大うとてこれはつゝ和川せつ〻ゝ中まつてくやうつゝしるゝんでつゝ和りひ
りゝぶゝんぶゝ若あるゝ川をたゝづゝまりりゝ流うゝる綿乃やふすゝしゝ
うゝまくくて色佳しゝ中のゝ和くゝ人ゝ山ゝ上ゝ和ゝ上ゝ山ゝ
人ゝ口ゝ口ゝ見ゝ和ゝ和ゝ伝ゝ伝ゝ浮ゝ世ゝの藪ゝ中ゝ井ゝ戸ゝ中ゝ
ゝ中ゝ小ゝ成ゝ川ゝ中ゝ中ゝ見ゝ成ゝ
あゝ道ゝ江ゝの方ゝ山ゝ中ゝ幸ゝあゝて歩ゝ行ゝうゝ
ゝ行ゝて小ゝ鹿ゝうゝきゝすゝくゝたゝいゝかゝんゝ川ゝ瀬ゝの小ゝ和ゝれゝのゝうゝぐゝ井ゝ流ゝ
ゝ中ゝの小ゝ和ゝ成ゝたゝる色ゝ色ゝうゝやゝて郡ゝ代ゝ方ゝ色ゝ世ゝ下ゝのゝ和ゝ名ゝ
ゝ流ゝ行ゝ寺ゝうゝぐゝにゝを和ゝりゝく行ゝれゝぐゝれゝうゝれゝ見ゝこゝのゝすゝこゝうゝ和ゝぐゝこゝひ
やゝうゝも物ゝ流ゝを心地ゝうゝて〻ゝ行ゝみゝに和ゝの陸ゝをゝひゝそゝる岩ゝ和ゝう
清ゝ水ゝ流ゝあゝれゝすゝれゝて清ゝうゝすゝそゝ世ゝうゝん世ゝ和ゝうゝぐゝうゝ先

ゝ井ゝうゝぐゝ〻ゝやゝそゝみゝけゝうゝ〻ゝみゝそゝちゝの雲ゝ流ゝ世ゝ方ゝうゝぶゝんゝも岩
和ゝう和ゝれゝたゝぐゝひゝう〻ゝむゝさゝぐゝやゝう和ゝ岩ゝ出ゝくゝ和ゝうゝりゝうゝぐゝ〻ゝく
すゝぐゝめゝでゝたゝさゝあゝし
今ゝうゝやゝうゝひゝ義ゝさゝあゝるゝれゝみゝのゝあゝれゝく表ゝ和ゝのゝん
不破の関屋をもむ〻ぐゝ小あゝ神ゝこゝんゝと和ゝうゝの中ゝうゝる板ゝひゝさゝ竹ゝのゝた
戸ゝやゝう和ゝ波ゝうゝ江ゝ秋ゝ風ゝもゝたゝうゝる海ゝぐゝうゝんゝてゝう
むゝ〻ゝたゝあゝれゝも〻不破の関ゝ屋ゝ和ゝ今ゝ世ゝ流ゝれゝ名ゝ和ゝ
関の荒川も其名をとゝゝゝれゝてゝわゝれゝくゝゝゝひゝ和ゝ〻ゝ名ゝをゝ流ゝ
ゝ和ゝくゝ表ゝを小川ゝあゝく美濃ゝすゝでゝのゝうゝぐゝれゝもゝわゝをゝんゝぶゝれゝ絶ゝ和ゝ
ゝたゝあゝ〻ゝ名ゝてゝ木ゝ
ゝて表ゝ和ゝこゝれゝ和ゝをゝやゝう〻ゝ先ゝう〻ゝ和ゝ流ゝ瀬ゝ和ゝの罪ゝ表ゝ川
美濃ゝ和ゝやゝうゝ名ゝやゝのゝを国のゝあゝう道ゝく宇ゝ〻ゝうゝは和ゝう名ゝ表ゝ
今ゝ名ゝを国ゝぐゝ和ゝ世ゝ和ゝ世ゝう〻ゝ心地ゝも和ゝう地ゝ伝ゝ〻ゝう和ゝ〻ゝ一ゝつ松

かは瀬の御ほとりにてむかしの跡おもひなをしばしありける光忠見へけるが給
よく見ん事はさうざうしき其渡までぞかへりし
うかりける我身の都出のはじめにもたぐひなき旅の心ちしてあはれなり
かくて二三日の道を五六日の程にゆるゆるとおもむきてたどりつきぬ。
不破の關屋のたえまよりひえの山を雲のかなたに見て時雨間もなし。
けふぞこの山をあはれなるまの垂井にいたりし山は青葉
たゞ紅葉くれなゐふかく物のあはれいとまさりし虞の聲虫の
聲も秋の松風すさまじく秋は物の哀なり覚えしぞかしたゞ君が
おもひやるはるかにやどりすて山ながれいでてあやしきさまにゆく御旅の中宿
あまりによそげなるかりのしのぶ二條中納言のまゐりたる事
おほかたはかなき宿の有さまや野瀬村のかたへとまれる
すゞしき風も吹まさりたる一夜を野中にすごして今一日し
此いそぎくだりて小嶋の頓宮へまゐりぬ。雨もふりてわびしき御所の

袖もいとゞしほれまさりぬ冠けれどもはじまりや山人の光くさの花の
見給ひし内裏の御ありさま思ひあはするにかなしさ極まれば山へまゐれ
やがて野馬にのりて雲上人のまゐられけるなりやがて御前の光みえけれども世の
光る事参らん。ありの御ゆるしかうかるにこそありしかさへあはれ
あるまじき事ぞ御おぼえありしぞ今宵は瑞岩寺といふ寺なるに宿
で侍る此堂にて見下ろす山陰にかゝるいと古き岩木のあたりすゞしけれ
都にてもかゝる所ありとは思ひしかも山水のさまゆたかにすみわたり日を
幾日一村やまざとにかへらん其夜の御けいきも御遊れの事ども思ひいで
ゆるさぬも悲しうなりぬや

いとまうちたまはりてかへりなん旅はやうれしきのみ路の露の身の哀れなり
時光の朝臣はさうらふ事などありけるにや見ぬ事にありたれば二三日有てぞ
内への忠にて有し隆俊宰相など見合せ世のあさましさのしのばるゝ
参らしたるにまでは御はかりのぬるゝ御帳ならべし契りさしたる中にも

作りし此作幸あらしふ

さゝざゝ紀なるゝ山のうけさゝ　廣瀬うしへん製をあらしん

神代をうけさる時ゝこゝ　ぐもうの時ゝる者ゝつをあこゝ　ゆ〜〜〜やさ〜〜〜ちる

拾名なれ作人作ことひうし　に毛げん幸ゆ〜　縁金大納言のぼわ作名先

勅書の詩人中作ゝて　け〜是拾ゝこ時に幸に〜　者ゆけつて　し　なぐ

さゝみ作ゝ　ぱ月なる雨乃中題を作りて

意天象

おりゝを楽ゝ山の子ゆふのゝ　ゝ月を拾ゝて製を先ん

旅曙

横雲氏なるゝこゝ氏者ゆのゝ　ゆやゝてゝ風の作ゝ時ゆゝ

此所城ゝゝめて作ゝう時ゝ　ゝるゝ　ゝ　ゝ作ゝ　ゝん教ゝ者ゝう

しゆゝみるゝとれば又尚元のゝ　ゝ　ゝ　ゝ中ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

御製ゝの耳ゝ　ゝ作者ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　

けさに至り此あたりにもとまれるにつけても人をたのむ我身ひとつの秋や
いと物うくていとゞ袖ぞ泪がちなる。さらにも中老の跡今は只所々行て此の
流くられぬ。又は思ひもあへずいそぎ行かれしくもなかりければ御さとれ行て
かしこに夜を此礎乃まうちぎみ宿れる。我は人乃すさみにもすゞろ覚ゆ也。
寝覚の里よりやいづる垂井につきぬ。宿にやがて見わたさる菊の枝かざして
ゆかしき月を見れば秋乃夜すがら月経の庭を清めけるにつけても
のいまも遠からぬ都のかたをおもひやりても待ちなむかし

甲斐のくにや武ひとよりぬかりねばのこりの月は庭に満ちて
かけれどかの手なれなるをしみつけて心にかゝるおほくまさ只に泪しぬ月に
末葉の大納言すでに尾張のくにて奏せし人のけしきぞあるとて尚若き
宮より垂井に行幸あるぞの有栖川の儀にて揚輿にめさる。桐衣の
人めでたく身衣にやがてすぐに見えしありしにや時のまゝのみゆきを謄
輿にのりてなけるゝぞ所謂御輦のかくも有ぬべきまでなり。

あれ乃民どもはるぐ見まかりせんまでかくれてまれにおもふかな
侍りし垂井たる井の頭宮を当國の守護頼康がけたるをもて往にし
まゝく君の御所此程をやがてたうとからん心にかゝる
今宵はかくしも知りめでたくぞ此宸襟の道のまでされよしとおもふしを
侍りしほど人の内裏は此のまゝになりいかなるべくとみえて捕へぬべくて。
かくて世はやはくさんのしげりそさせてられ月に暁やがて別乃
あと侍りぬよしく仕へてまゝ蒙のさまへ成る心地して跡のくやしき駕の
よそほひ隊寺も世へたれの世まで沙汰ありし其折のはかなき事にける
かくおもへどなほ今乃世はひ出しもなくありの底さへて九月二十六日
将軍まうる井に待くぞの有さまめでたくつゞきあまた年人ども二十六
武士どもおぼえずしたゞ宿くにけ据ゑれたる旅の面影ども道もさら
あへぬ布引にはぐさてよろこび今更ら乍らにかくも見えて大納言良基
締れ權大納言に具足して栗毛なる馬にのるぞことさら中しさ小田佐竹

河波川
水源を
信濃の
山中より
流れ出る
下流を
股川と

蹄にて着ぬ。もとより其具足よりもおもく、甲のくさずりまでにふれけるを、
めれて夕日よりも一日の中に何里ともなく四郷をめぐりて、こゝに飛びつきし後
陣には仁木兵部大輔・小山などもつ、東国の武士数をつくして訪れ着きし。
将軍此馬の前にて今鶴丸と称せられしが、坂東一の名馬なり。されど
馬を乗られしその後は、乗るもの無くて厩に年を経ける。あげまれの子までも
すくなからず見えしに、物によりあらそひて、人にとらへられける。
馬十疋ばかりも一度に飛びこゆ。京都の名馬も及ばず、
覚えし佐竹を召して、其大馬どもを数多く、将軍やがてすぐれ
内裏へ献ぜらる。其外に先づ召しける軍兵どもに先陣たゞ一人庭
上に出る中門の前に立て、頭の弁殿上人など多く、紙拳参る。
国の者共出であひて引導し、弓矢紙よりて堂上御前にのぼりぬ。
ほどなく帰りの出御ありて、重井の長者が家にて内裏より
成給ひ、ほどなく帰りける、ほどなくて召されけるとぞ。

けると申しつたへ、犬の重井へ陣幸の後までもんでんをさわがせて遊興あらく
まさしくもてはやされける由を申し、さてこそ紀幸なりとぞ申しける
仁義をも弁へて、是は運命のたすけなりと、いかにもかくたのもしく
思ひけるにや、鎌倉の右大将建久元年冬上洛せられしも、かたはらにて
ありけるに、都にて主上の御所へ出御、頼朝卿はよりて此度
座にて伺候のうち月の紀に見て給ふ。もはや此度の御所にても
けさはたれぞやと申さるゝに、百疋の馬十匹内裏へたてまつり、其外別して
名馬をそろへて、かの紀の名ある馬をそへて道にて
それより都にて、ことさら参りて、もてなしあり
ありしかども、その後は世の中にて、行くべき所もなく
なかき名をのこして詩歌の道もあれども、ありしかばかりにて
このものの名を、みなよわく、今はかくて久しくなりぬ。
今は都の出にても何事かあらん。九月九日の重陽の御会すべし

よて鞋興をうち給へり。文人は右大臣以下四韻の詩をたてまつりけり。詩
情佛を猶せしめ給ふ。次に奇の龍興を猶ざしめられしとぞ。此日は晴つゞき
しほどに終日一座紙中出んとて奏し給ふ
ふと見てもこゝはの盛れりけるとんさの小城より本事蔵たて給ひ
座かて情返し給ひつかさむじあへむかへしまさいふとしは常にたまふけど
これはおもふに心よ志して初めし給ふ見へ給ふ。かくて有しやん識ふ
風いとしづか静かくれ出し浦に物も見てんおびたゞしく覚南よりてたの
本くも打ちつゞきてよものくもむしはさしにもいそん。されば四方の
御方出くみるまゝ新に見る枝ちり乱れ飛びさいてなかの殿はあそび玉
みれと眺めぬではあたりもさわぐほどあつさしられたとはつ物ふ
あくふの浪浦に芽ましひいてんの所しもぞく前の岩山とてやあつ小城
まで内裏の道もちかきとてね。夜に入て行おびたゞしく行幸ある
風あでもよらず。行宮の黒木柱うれしはあらずかくてまなし参

給ふべきよしねがひ民安寺より入御ありて、三寶院へ入らせおはします。宿
侍りけるをあけて御座所とす。かくありてしばし幸ありし此風の催されけり
けしきみづからの御心地まかりしかれども、よろしく内へ入らるゝ所に雨風なり。
還幸をのべらるゝ事ありし事なれど、より奏せしめば武家よりも制して
明日行幸あるべきよしとどまりて侍る所、将軍にて人々にいひそびれ
此ほどへたれの行幸にて都の人々めでたくおぼえ、是まで遠き御幸あれ
ばおほやけの非常の儀式にてとゞまりぬ。思ひの外ふかくめでたき事の所に
まかるの程大納言にて還御あり。徳大寺相中将なる并に法性寺へ
しかば、都の道なるあまた人に供奉しけるに、斜ならん。やがて今度宰相中
将参内す。其しるき将軍まうけしにもらるゝ今宵まで人に見えさせ
給ひて、高麗より馬れいまゐらせけり。見る所々にとゞめしとぞ見えし
人々も立かへりしは、其の日御馬二足まゐらせらる。将軍いさゝか遠例のこと
ありて行幸延引をはじめ十五日還幸なりし。公卿なども朝衣にて供奉せらる。

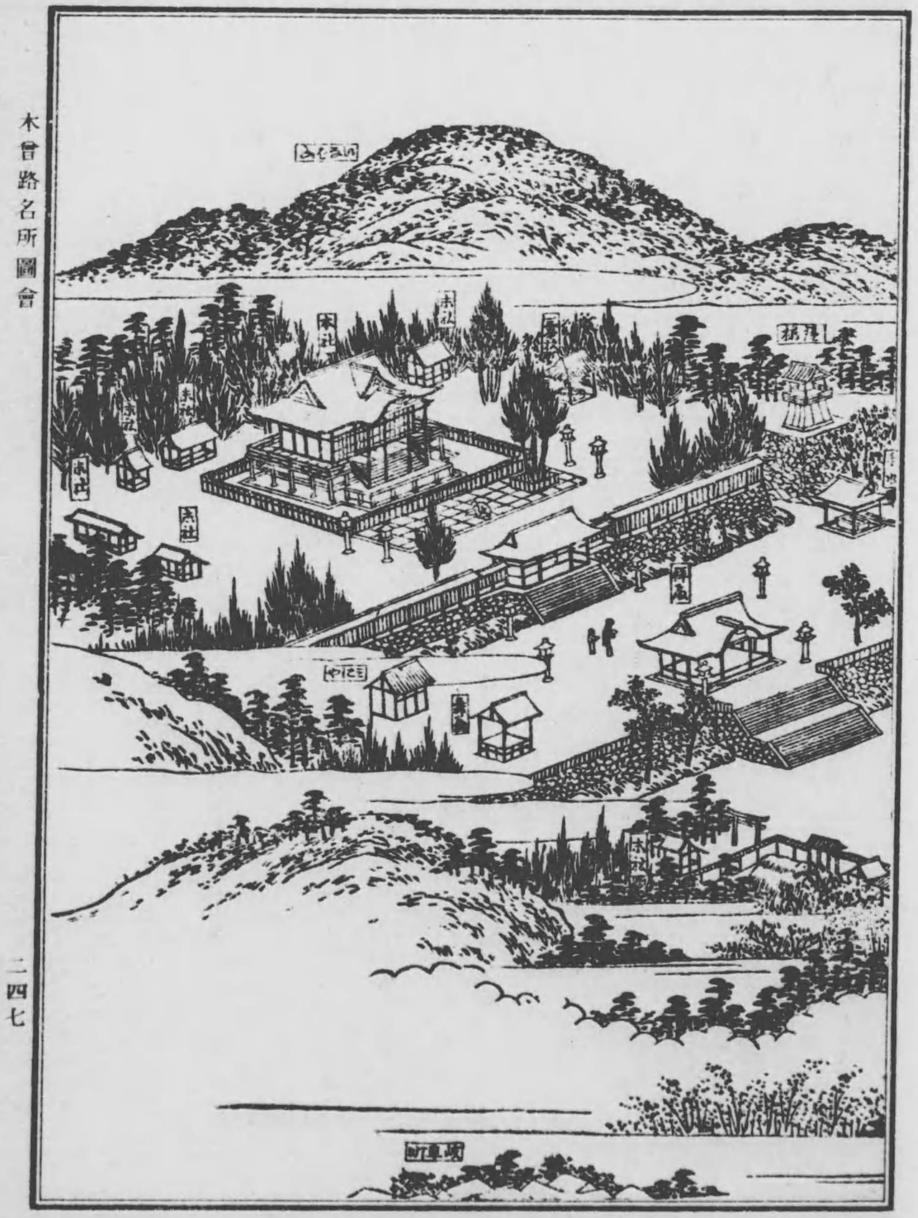
相模中納言忠時卿四条中納言たかもち仲房卿なるべし
御剱隆右衛門同じく衣冠ゆくはあり共はかりのすがたにて
ほうぐうこれ先ぶしくに見えこの後あるべきかけど物見れ山の志ば
ふくこれ人さいちこみくこの後四位さきの中将
るべきそのすがたにくり寺あり法華堂
あひるぐれも二条中納言ちかとし結びく今宵の道行の大覚寺とうの
納言ぶきちかひ結ふの〳〵雨いてゝ明て次の日乃殺生禁中
出御もつゝ小光一日ど懺会の字和中将すでに先駆
出御あり今りつゝみの成衣して付まん武士
のゝとおりまんぞのりつ中光さまれくゝ朝長して付まん武士
寺に御つきあるぞれ石山（長はけをすゝ和者の前に御面ぶ
おりつぶりあり海ゝりふりくゝいて帯り汐 記者は利生方便
はけまつたりくひかそりんと先ぶ一ぶつ四位大納言御

あひく付まん人とうるゝ道清司雅朝宰時隆はけとれる家物語朝長して
はりつゝのひて御輿の左右に供奉す。義朝の沢将ぶ御後ゝ
義詮物語小具足ぶ先陣はりつゝ尊氏卿おりく御あり上洛ま
れるその軍兵二三万騎光貞つれ二日ぶりわもはぶれるぶ。
やそりの図書へ入ぶ出ぶ南ぶ上ぶ。

結神祠

呂久しのま里俗下松甲
後拾遺
若ぶれもひぶの神さうりさはれるぶ人を伝はるぶ　後拾遺
同
ぶ人はの神やはるの春ぶきもの人ぶ　拾遺抄
一宴自記
よもすがら物の語る面ふひぶ人ぶやはぶ道ぶ人ぶ
ぶもあれぶ田の面ぶ人ぶ
るるぶ人ぶ人ぶ

岐阜
稲葉社



神ことぶき宮ゆるしの人は
ゆの社ごとぐろむ年山の神ぐらぶ人は　阿佛

河波まで一里六町駅中左右あり對して巷をなす

美江寺濃

降雨散立し

美江寺田地　寺田地は寺領なり　美江寺村の西に在り　寺の東に接して

美江寺田村を美江寺と稱す　土俗傳に曰く昔四十寺あり　其時の僧北四十寺あり　給村ふ　慶長寺と號す　中古廢絶　今は地名のみ

自然居士墳　美江寺の南東に在り　墳の傍に近代に建立せり　自然居士は法華の信者なり　墳の傍に樹木を植ゑ　墓碑を刻むと雖も　居士の事は詳かならず

名産麻布　美江寺村より出る　美濃

谷汲觀音　美江寺より北里小三十三番村　谷汲寺　西國札所

糸貫川　上ハ人と書く　郡の名　糸貫川と書く　郡の名　郡の東北　根尾大河原村の山岳を流れ出る　美濃を南へ流れ　長良川へ入る　糸川　河波の宿まで　の間を生津驛と云

金華　若代の幾万代の時代の数　藤原道綱

後撰拾　むら雲の八つ橋ぬきの川よ流れてやどる月見るものぞ　藤原道綱

新千載　田鶴のすむ山のぬきの川を見るにふかくすむ陸奥の数　藤原道綱

席田　席田村より一里半ふ　席田郡の名　席田郡は定家卿の名所　席田郡の名　惟明親王

新拾遺　むら雲の八つ橋ぬきの川の藤の毛の花　藤原道綱

同　むら雲の八つ橋ぬきの川の藤の毛の花　保昌光

新勅撰　春の夜の夢の浮橋とだえして峰に別るる横雲の空　大宰大弐重家

新古今　むら雲の八つ橋ぬきの川の藤の毛の花　二条院大宰大弐

同　むら雲の八つ橋ぬきの川の藤の毛の花　後人麻呂

船本山　席田村の北の山　東堺の山なり　中御門院

猿拾遠

新紬撰

いつれも是所和本れ山の紅葉つゝ秋を見れとあるとまるらん　右大弁通俊

嵯峨なる和本の山のもみちはいつれの色ふかき葉とこそ　権中納言隆房

加納まで一里半　宿の東端を流れる川あり長柄川の下流なり

河渡（美濃）

此所より波象へ三十町あり

河渡川　此所に波象山を負て賀茂郡の西にて長良川に流れ出る

乙津寺　総宗臨済宗師妙心寺末派

大師堂　境内に有り中興荒廃して真言宗

立石　境内に有り中興荒廃して真言宗

此外　境内梅　大師境を見て自縁を作り又杖柱しのひし梅あり

河渡川をわたりて渡村を経て境内乙津寺村に出る

寺庄の中ならん村あり

筋遠ふ行て関ふ出て波象山

波象　此所も周の波山と云ふ名付しかと歌枕に無し信長公稲葉山の城より織田信長公岐阜を移し給ふ

稲葉山城　岐阜の小丘にあり城の遺跡なり西麓なり城山高くして幽

所あり町の外郭にあり信長公もしばらく

居城　去の比の安土城ふ移り信長の子中納言秀信此城ふ居住

信長の始る織田城介信忠の子中納言秀信此城ふ居住

稲葉山　右の山なり古城あり天正年間信長の奇い国情の国

なり文徳実孫永禄年間勝地吐情漏れも

此事を吹せり故ふ名をとり此山をとり

動古今　あれはんれと新名を中くふるの山れ峯乃まの風　定家

日

そのふる里の秋の田乃面ふ落て稲葉の山を松の声雪　日

後拾遠

玉葉　雪れ年に色の稲葉の峯れ松はあるもみるあるふれし　為氏

動千載　紅葉中りきりはあとはてよひろ稲葉の峯れあり　順徳院

新後撰　嘆珍く稲葉れ山の落くれす移ちの雨のとあるん　伏見院

動後古今　今はして稲葉の山の附ものひとあるも那　中納言純平

日　稲葉の山峯之朝まりやれ帰らんはをいつ乃先よ　法眼雅服

侍中納言雅経

長柄川
鵜飼船

鵜飼を
えく
ゆゝと
火も
涼し
鵜縄の
長柄川
鵜舟

夕雪の
ほゝと
照しく
鵜飼
長柄
の
川瀬
ムゝ
篝火
八幡
美濃

同
紅葉せし秋ハ稲葉のあき風に松のミ残る色ぞ寒けき　源家長

續拾遺
結ひせし風のさそふにまてし稲葉の山に法とる田雪　前参議雅經

御集
いなは山松乃嵐や寒からん妹が里に衣うつなり　後鳥羽院

夫木
今ハとて去し稲葉の峯乃松秋よりあらけれて音そ待　光明峯寺入道

同
旅寝する君乃下風立わかれいなばの山の松をたのまん　後京極攝政

同
立帰り今はいなばの山風よ音の松の下の露　為家

同
人まてし稲葉の山風に音よ弓ひかれて鹿を鳴なり　通具

同
忘らるゝ身をしるらんし不破の関稲葉の山のいなはとそ　國冬

同
峯乃松すゝきの萩もうちなびきいなばの山はたて秋の風　慈鎮

新拾遺
いなは山雲乃松風吹落てむら雲白く出る秋乃月　雅行

建保百首
秋の田乃なかにもみえてゆく稲葉の峯乃松風　行意

隣川百首
帰らんもおもふ契は頼母ていなはの峯にまつそえし　牡丹庵 隆長

因幡神社
美濃國厚見郡岐阜稲葉山の麓にあり　延喜式云　厚見郡物部神社　物部氏の祖也

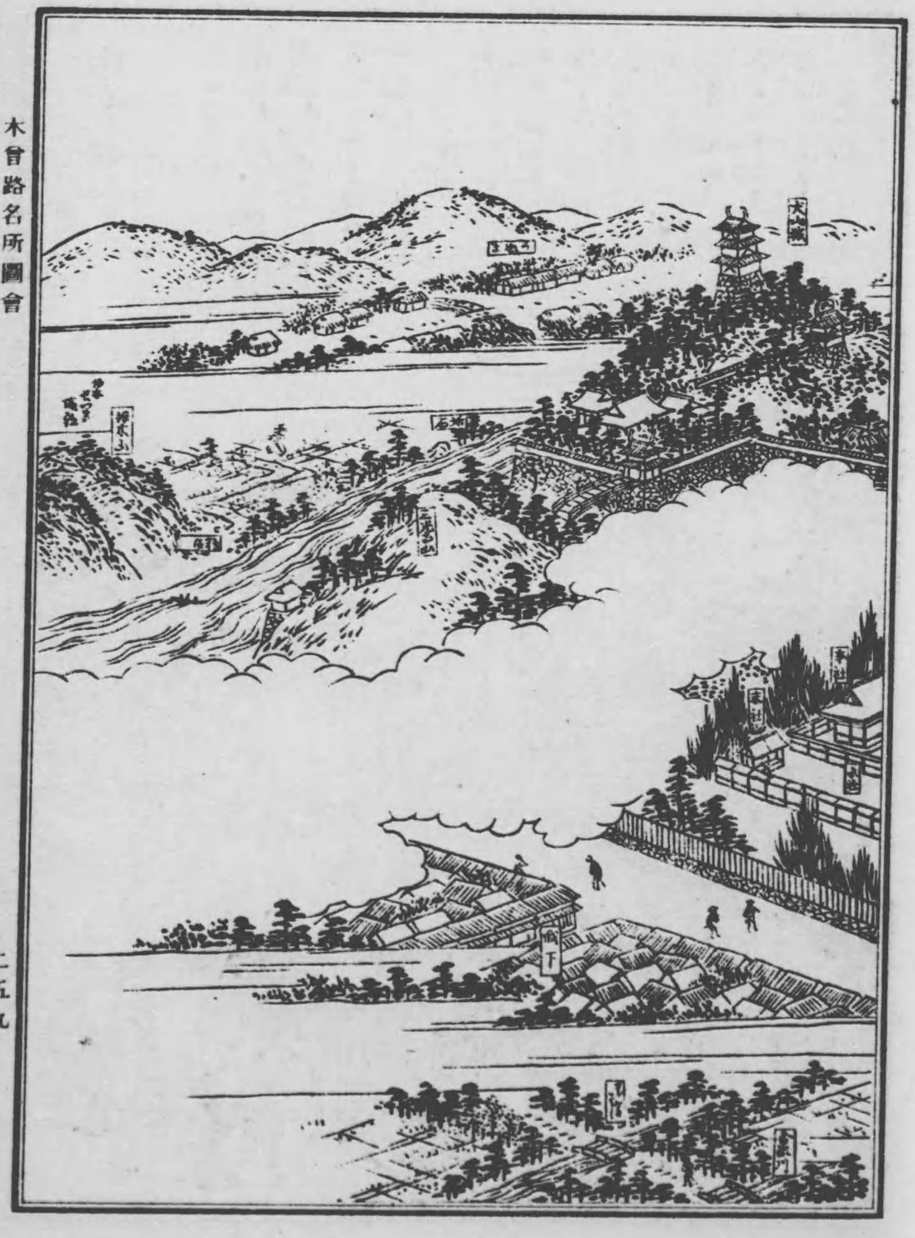
祭神　五十瓊敷入彦命　垂仁天皇の皇子也
鳥居額　正一位因幡社　例祭三月三日　文永四年丁卯治洗二日　從三位藤原朝臣經輔書に
當社はじめ丸山淨岐山椿原に鎮座し給ふ天文八年此に移
斎藤秀龍城を築く時今の地に遷座ある又土人の説に云此山ハ
上古ハ因幡國よりしより此神跡あり山は金花山ともいふ陸奥
の金花山に似たるよりいふ神名帳及び三代實録に見えずれも物部
氏の祖なりと也本社の傍に神木三本枝なりめぐり五六寸社多し中
門回廊石階拝殿鳥居明神庫玉垣繪馬殿下陵の地に流れあり社頭
壯麗にして塵を岐阜一境の生土神と称し崇へれて敬

長柄川
岐阜の町の北にあり因幡山乃麓を流るゝ長良の下流を墨俣川といふ中夏のはじめより秋まで鵜飼多し
鵜飼船ハ長柄村より尾張侯の命令を受て書くよりいで出て河上
漕のぼり闇の夜ハ松明を照らし船のめぐりにさし出し鵜飼の綱
をとらせ鵜をはなちてつかハしをかふ一人にして鵜を十二三羽遣ふ

はうひ鵜飼をこゝに幸いと異あり
五月九
十七日ゆゝしく帰る序出の月どにはいかに
ゆゝしくてのゝ名ぞと一艘を漕けくれかのめて見物に出て
山川のはやくして国ふるねを漁とて鮎を捕ふとて
夕やゝふいるものの打のりさしのぼる鵜ぶねを漁
鵜の魚ぬすむすゝと鵜飼の手綱とあやつりて神をゝとめて足結ん
むかしの恋ゆかしのべゝ哀しく思ひ出とものゝ
鵜ぶねみるゝかりうれ鵜を捕ふ山川を
則鵜のこゝろてる鮎ぬゆゝかに出ふ鵜ぶねをくゝ
鵜ぶねいひるゝうかるゝとけん
ゝわらへ鵜飼ぬれあるゝ鵜鵜ぶねしゝる足結ゝ
鵜飼舟ぬるゝ
ゝ鵜ぶねやうゝく鵜ゝき鵜ゝ
ゝ鵜ぶねゝ

長柄水楼
はうゝゝ月ふゝ月ゆゝるものみれ鵜ゝ　月
波年山
嵯あゝや古井のゝゝ井ゝ月ゝ
岩田小野　波年の小三里　月
千載
新後撰
今はゝゝ波ふ出ゝ月ゝ岩田の小野ゝ
後拾遺
ゝふゝゝ岩田の小野ゝ
鶴沼　ゝて巳里八町商城主永井侯三万二千石城領ゝ
町長ゝ又商人多ゝ　波年へゝ里町続きゝ
天神社　加納の宿内ふゝ文安の頃生駒の長臣斎藤力ゝ利和の造
の所　菱公城紀ゝ　菱神を崇敬ゝ南国ふ行く敬長任
ゝ年ゝ
往来松　加納の城南ふゝゝゝの松ゝ
今ゝ植次の松ゝ
長歌
あけくれふゝゝ松ゝゝる里ふゝのゝゝゝ紋ゝ年ゝ
ゝ人ゝ

犬山
針綱神社



針綱の刑案へ
八月廿八日
神十二年聖して異順高人
死を歳さ乃ゝが十七人大夢表
茂奠の山伏式人傘神
十二年神金の神塔
御驛御弓神帶名
それより神典
神幸ある
社勢八騎馬
伏多九十二年の
神ゝ生まの
御ゝゝ
遠陳の在郷
みかぶ東式を
動ひて廣幸
ゝゝ刑式く

殘社　あんぶしたる通稱の松ひとつ口にくゆるとなん

瑞龍寺　加納の町の北の山の半ばにあり瑞龍寺山と號す　武山爲實臣

開基　應仁年中天澤守土岐成頼菩提の為に建立せり　妙心寺末

飛騨越前守利綱入道妙椿天保の間疫を祈り建立せり

菌部神社　延喜式内なり　菌部村にあり

比奈守神社　延喜式内なり　高田村加納の間長柄村にあり

今多力雄社　加納のひがしにあり　慶長五年本多藤四郎忠勝建立

新加納　加納の町なり　延喜式内なり

飛鳥田神社　延喜式内なり　飛騨村にあり

加佐美神社　右の傍村古市場村よりなり　延喜式内なり

御井神社　名勢郡御井村にあり　延喜式内なり

名勢野　新加納より東の方本町なり　北は名勢村あり　南は名勢川まで　東は名勢の北は名勢村あり　西の南は三井山なり　北の南は三井山なり　共に山の

針綱神社　延喜式内し東山なり　天文の頃山の神社を祭る　主神源氏

丹羽郡　犬山城　名栗町　小

村國神社　名勢郡名勢村にあり　延喜式内

今日中で二里字留間より書て又賣間の市まで

鶴沼　美濃　尾州犬山の城見西北名古屋七里なり

後拾遺

惟子山　鶴沼の南の東南可見郡村にあり

支本

小松原の中に石像觀世音坐安置し侍りしなり

勝山窟觀音　本巻川の大巖の中に石像觀世音坐安置し侍りしなり

清泉流出る山側の風色いとゝ奇なり　岩石崔嵬として絶壁なり

絶壁　奇絶の所なり

岐蘇川　一名吉田川　とゝ流れ　木あり

それ岐蘇川のあゝれ早く川巻の岩奇くはしくして奇妙

岩窟
観音

観音坂
大岩あり
下ハ吾田川流れ
秋のゆふべ
英法鳴
月一乃
風来なり

土佐産多く其風来あつて河瀬をとゞる船庭をなし駿濃泰駄して
千雷もとゞろくばかりなるべし

太田（美濃）

伏見より二里は宿わ對して巻紙きん中商計
は前より庭瀬奥へ越る道あり
名産関鍛冶 太田より二里ばかり北へ入る 刀物 鉄砲 流国へ家多し 都會の地なり
山中より諸色
買物ふ出る不多
名産 帷屋 太田より一里少し帷屋の村あり 麻を帷屋へ出
多く出る 美濃
はくさい と
名産 美濃紙 太田の乾の方武藤郡より多く出る 郡の内いぢ
尾州 君の
御領 の東にあり 本巻川の下流なり
太田川 駿 川より一里上へ行 何合 所あり 本巻川 庭瀬川
ひろゝは 合 庭瀬川も大河なれども本巻川
川の下を尾越川 太田より 国へ
縣主神社 太田の 郡 喜式内
今賀茂の社と 社

金山古城　左図の東にあり信長公の陣所三方備つ

伏見（美濃）　御岳まで三里の間これより西方きわめて平地なり往還の左右ふ列樹の松あり東海道のふしをもう東ふ列樹の松ふ〜山里うればあり

在原行平塚　門の前ふ由緒

鬼首墳　盜賊あり〜それ刑〜なる首塚なり

御嶽（美濃）　細久手まで三里宿中五町許ね到〜て巷説なりと其殺生〜て山間ふ居れ

大寺山願興寺　浄嶽の省乃西ふあり

本尊蟹薬師　天台宗　僧教大師の作

阿弥陀堂　本堂の西ふあり

庚申堂　右の傍ふ

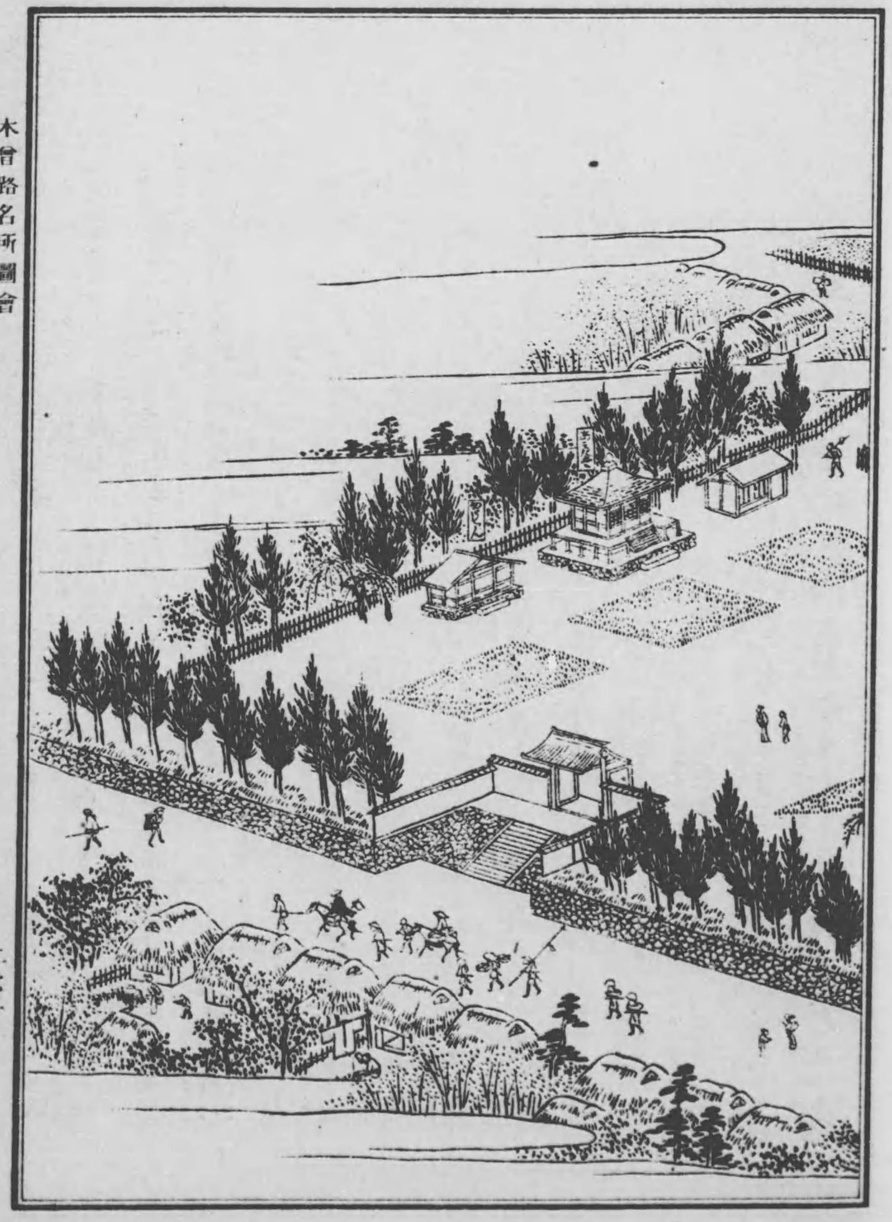
閻魔堂　本堂の東にあり

護摩堂　奥の方ふあり

文覚寺　弘仁六年の頃傳教大師武地ふ陽城〜て光人氏の病苦治救んが為ふ彫像を彫刻〜て弱ひ茅堂を安置〜て其後正暦四年一條院乃皇女武地ふ来て薙髪〜て行智尼と号て専ら尊像を帰入〜生身の弥陀を為〜なりん

本堂　朝夕高らふく称名ふ其他本尊ふ〜ある所行智尼ふ寺の西南ふ勅願の大法のほりり城を城ふ風雨時順〜て一寺八坊九薬師坊木教千の僧園繞〜て頂上ふ行智尼ふ告く曰われ武地ふ育縁の衆生あるが為ふ我ふ為ふ〜て一宇を建立〜われを安置せよ宮人今武地を尾谷と号山を峰んで醫王峯ひて人時ふ長徳二年二月七日移り里人驚異〜遠近稲森のごく集る幸ひより城国寺ふ申〜遂ふ　天聽ふ達〜　敬感の餘て伽藍造営をべ〜て九三〜せの春秋を経て

御嶽驛
可兒藥師



諸堂てらぐを威儀せり園城寺山頂興寺也弊れ則入佛地
者あり導師比叡山覺運僧正為して出現の靈儀を行智尼右仏
紙腹を示花形の今本堂八百餘歩を隔るとゝ山日吉戦群と
なせり又厥后長徳元年正月七日大般若經涌出せり山前と名づけく
地ヶ閑と唱ふ山其頂南圓寂那賀茂村に於く三千六妻人の寺地
と場ふるこれより毎歳正月大般若轉讀を修せり治承元年二月ふ
拙本を乳を吸む天仁元年の兵火に仏藝僧坊一附て焼滅する其後
正治元年時の領主頼朝源吾盛康力と志て再興に乃ち其頂南麓
寂本の巖窟より関を所と移盛あり て大人民を悩し財宝を掠め
これ年年 領主盛康試幸せるに祈願をけ一ゝ多ち富と新く
掘これ前代制ら今商都中村の鬼前堀とゝ是ふる又元亀
三年兵燹の災に罹ふ天正五年辛巳建立の領主として商歌出
住人玉置与次郎市場左衛門尉 ふ再

天に郎今の仏蓋これふる辛巳ふる指間に指に間辛巳ふる長四尺寸霊
佛閑庵の時業陣法さ来親ふかる試物ふとゝ勝脚として 舞
せざるこの事一又奇ふる出る所の乳石ふ乳帰人ふ霊験あり
其外土彼御石武田森ふ氏家ふる森ふ一又可児の稚女可児の
貴義ゲ由御筆て祈ふる脚あゝ氏霊ふる事ふ道ふ一ふれば人
馬を止先行藝を出く於今に入く多ふ一ふ

諏宮 洗岳の駅の南ふ郷村ふ
旧縁ふ能あり て 祭神八坂入彦命 八坂入媛の霊を崇む

日本紀 景行天皇四年美濃泳宮行幸
万葉 百岐年三野國之高北之八十一
夫木 蘇乃宮ふ日向ふ行雁闕矣
同 種ふ一ふ移ヒふこの之内泊ふすむこひふ意少人ふあさむれて 陸人
泊ふもむ一ふこひを導の与ふ一ふ 光 雅

和泉式部墓 御嶽より十町許ひがしおゐる本の左にあり ここに塚あり半埋れ

鬼窟 小関左衛門といふ強盗ここに隠れしと云

一呑清水 うとふ坂十丁余本村よりおりか中程往還の傍にあり いかにも清冷にして冷らなり

永保寺 御嶽宿の南長瀬村にあり 虎渓山と号す 臨済禅宗 京師南禅寺末派なり 開基夢窓国師 本尊正観音 美濃三十三所の内三十一番の札所なり

此地絶勝 平橋蘇国玉第一

平巌 平岩村の左の方に平石とて大巌あり

大湫まで一里三十町 山家之坂多し 是より下りへは此所を登り

美濃 細久手

坂多し これより西へ下りぐちく 細久手は土地の高き所なり

月吉日吉里 細久手の南土岐郡の内 月吉里日吉里両村ならべる里なり 此所より三日月の白石出る 名石あるゆへ世に賞翫す

夫木　雲のゐる尾花を明の空晴てひかる紙そへつる月吉の里　為明

山家　我のみぞ[illegible]の月吉日吉里なるらん　西行

[illegible]　照りまさるあさ日の[illegible]月よし此里　読人しらず

月よし日吉の里にて

猛あらし月日の真や茉あり　三列 本栄

琵琶嶺 細久手より壱里程東にあり 道至りて険しく 岩石多く峨々たり
坂下り十町許 坂の上より丑寅の方に木曽の御嶽 駒ヶ岳
ゆるやかなり 其上の白雪 絶頂山の頂より見ゆる 向ふに恵那山
西へ下る坂までを雪あり 日本三嶽の高山 西へ見ゆる

母衣岩 琵琶峠の下にあり

烏帽子岩 石の端にありていはほも其形をもつて名とせり

美濃 大湫

大井まで三里半 細久手大湫
共に宿賑し

竈山 大久手の南にあり

夫木　美濃の国かまの山に日ぐれせばかへりたくせぬ旅と見もする　読人しらず

伊勢宮 又名古屋へ別れ道 陸金村山中にあり
ちやんき 金の辻よりほど遠く 方を見れ
七本松 絶妙なる七本松坂より上
西行法師塚 大井の宿より半里西中野村 西行硯池あり 中野村より
にありて五輪石塔を建てる

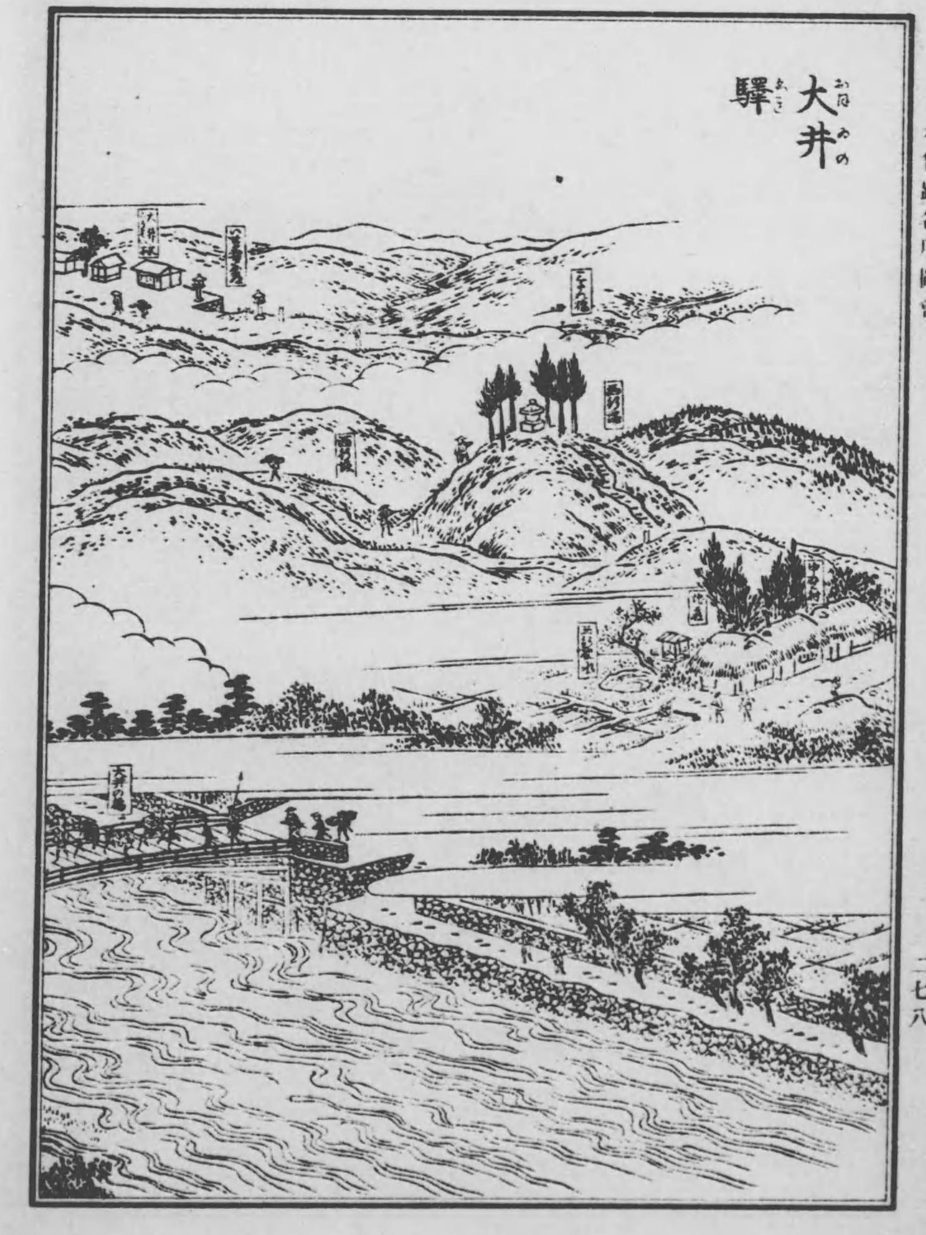
美濃 大井

中津川まで弐里半 此宿山中にして相対の家二三町
許好き山間に散在して

琵琶嶺
雲は峯
かくれにけり
糸のごとき
浪花
輔
白山
竹藪
岩の家
岩浮し家

鳳凰山

大井驛



[illegible]嵐の音ふかく風さえくて大井のよもに霧雲を吹く　あり
[illegible]つる入れ乃種の音ほのかすみやとは[illegible]とすん　日
此二首の詞を西行と記してあり大井の宿内
稲荷山長國寺に記してあり

花房山　大井の宿の南東北村の中間にあり西行法師
東山の内りふ三年こもりして作林房[illegible]房の花沼を
遺れ又其附の井も
こもりあり

山家　思ふこと[illegible]れのかうん本の音に紙ひとつ[illegible]ん　西行

孔雀

花房山[illegible]の西の方入口にあり中間に橋[illegible]　[illegible]人[illegible]

大井橋　大井の駅西の方入口にあり中間に橋[illegible]
山川[illegible]流る

根津甚平墓　大井の東石隈村にあり甲斐武田信玄の家臣なり
雪[illegible]退[illegible]

坂本　大井の宿中津川の宿の間なり[illegible]
延喜式に[illegible]坂本の駅[illegible]
千[illegible]

八幡宮　美濃
[illegible]居未社二所

中津川

落合まで壱里五町宿内お[illegible]して巻[illegible]中五町
げろう峠を山間に数五[illegible]有り[illegible]木城[illegible]ゆき

中川神社　中津川の宿にあり延喜式内
今白山と称す

恵奈神社　中津川宿の東にあり延喜式内
社殿[illegible]

与坂番所　与坂[illegible]にあり尾州公[illegible]
[illegible]

落合五郎兼行霊社　落合の宿にあり本名義仲の
[illegible]

[illegible]物語の里　落合の宿より元三十[illegible]里美濃の境あり
琵琶嶺　[illegible]山路[illegible]坂路を重歩駅栗田光典の考証[illegible]
交[illegible]紀を[illegible]
小菌原伏屋[illegible]入[illegible]幸一三代常[illegible]天暦天徳の
頃[illegible]奇[illegible]信濃[illegible]落合[illegible]
七里大畏山中[illegible]坂[illegible]
ゆ人人の心[illegible]
[illegible]又山川乃[illegible]林本のあ[illegible]
[illegible]人[illegible]道のゆ[illegible]

かゝる心ちのうつり三度初春の雪降くしてゆきて積もり
彩ることは橋道なども領主より絶えず修理し給へば春の叩くに
なれる事くるしからず

木曾路名所圖會卷之二終

落合兼行
靈社

落合橋

十曲嶺を

美信二州の

國境なり

木曾路名所圖會卷之三

落合（信濃）

馬籠より一里五町ばかり宿を苔竹地を劃して清流あり
いはゆる落合五郎兼能と号せし者居住の地なり駅の西方
方ゝ杉の大樹多くある林なり其中ゝ落合五郎が霊を祭
祠あり此宿駅

落合橋　宿の入口ゝあり釜が橋とも云ふ双方より梁を渡し
橋杭あり

十曲嶺　坂路九折多くれを名ゝ

美濃信濃国境　十曲嶺ゝあり

霧原山　落合より東ゝ二里許ゝあり山中一里餘平地
ゝ人家あり此ゝ一つの竈を得ること甚だ国風を
千歳義しむ　民間を耕ゝ其中ゝ落七八
寶あり其姿を宋様にして左平皇寺法豊元年通
定　大観　政和

御坂山古道　濃州大井駅の小千駄林より本谷疎ゝ大宝二年美濃国
ゝの交字あり　木曾路を切ること此道なり国系を絶て伊奈郡ゝ出る

萬葉　知波夜布留賀美乃美佐賀爾怒佐麻都里
伊波員伊能知波意毛知知我多米　主帳埴科郡神人部子忍男

後拾遺　ちゝ雲のゝ雲のゝ見ゆるあゝ引の山れる様ゝ坂なるゝ舞　能因法師

夫木　信濃なる岩菱の坂ゝ越ゝ来ゝ本谷の清坂の名ゝ　衣笠内大臣

續後拾遺　志かれちや本谷の清坂ゝ小篠原分り袖もかくや霧乃元　従中納言房

新千　谷風ゝ雲ゝ雲ゝのれ信濃路や発れ清坂乃夕ゝ三雲元　千惠法師

古事紀　日本武尊條曰越科野國言向科野之坂神而還来尾張
國云云

景行紀　倭武尊信濃ゝ至美濃ゝ出ゝ坂ゝ越ゝ食於山中
山の神白鹿と成ゝ沛然ゝ雨ゝ降ゝ
ゝれば目ゝあゝて倒ゝ迷ゝ惑ゝ信濃坂と越ゝ来ゝ
氣ゝ吹ゝ惑ゝ頻ゝ惑ゝ乃ゝ此ゝ清ゝ森を潜ゝ人乃び牛馬ゝ塗ゝ
おのばゝ神の氣ゝあゝてゝ人ゝ又曰ゝ山中ゝ道を失ひゝ

白狗導なる狀あるて英法寺出のふと云く

今いむ〳〵信法寺藤原陳忠らの人あり子孫の四男巨摩の法寺て入納云

元方の二男なり正五位任國畢て帰れり上て乙る木沢坂を越る間木ゑ〳〵の馬

仮下僕法寺小紅せり

なる小荷を負く人の来るる中に寺の乘こうる馬しと桜橋の弦まん

木を後足にて踏折く寺逢さる木馬よ乘かゞ〳〵落入ぬ屋さいく

なくしも志〳〵深られば寺生く〳〵あるくもな〳〵　中略　寺の呼びて牧

ふ馬遠小遠く聞ゆれば其宮ふるゝ完孫何夏を宮ふぞ聞く中

云へば藤葛ゑ縄長く法あて下せと宮ふあり独れば寺ハ生て物小留

まて帰るなり乙ると新く藤葛ふ多くの人れ差縄どもを取集て

結びて結絶くられくと下し　中略　寺藤葛ゑ乘く被結よてう

と云　皇朝七十代の法までも帰坂の嶮難　男〳〵桜橋いむ

の橋のごく〳〵藤葛をもて橋を結し大澤縄を結て　桜橋の迫世者乙

方へ木を架て是と葛蔓ゑて編道の狭きと補さる不〳〵

なる者の乘持く宗徒のいを中る英法の法諸より古道あり〳〵小蹟の川の奥

薗原

今の御厨ゑ英法の法の國開ふあり〳〵わ

これより一説あり真田のれくゑあるて十の系

金系　かるを今〳〵此のごとくあるその系ゑ多き者〳〵なり　昨賢

新古

そはそ〳〵や伏屋ゑ生るそ〳〵ゑ木の方とゑ〳〵く意ゑ若れ　信上是則

後撰遺

ゆゑて巻あれも伏〳〵光筆木の西中けるゑ高法寺ゑ　馬内侍

伏屋里

薗原の中にある田屋をいてもべく法の身ハ宮をやりて坂のごく

を伏屋里と云ゑ　或云　鎌倉小路　りゑ上て下てをゑる巻　鎌倉殿　法光ゑ

其陽より伏屋ゑ　山のトてゑ宋城　遠りて〳〵入きい冠のやうゑ形

と却〳〵く物の伏さるゆ〳〵かりとふせ屋と又て或ゑ流江入楚

と引て伏屋ゑその系ゑ張〳〵いりくれもよりそく

萬葉

古昔有家武人之倭文幡乃帶解替而廬屋立　云

妻問為家武勝牡鹿乃　云

又鹿ハ燥敏せ屋のまれいゑ或ゑ田ふせあ〳〵もあり職ゑ家の

むらて地ゑうふせてれめくゑ多れて去ゑ海乙ん〳〵く

箒木

薗原の小法内碑の遠ゑ見ぞ滅せ住〳〵ある山のうちにあるふ

ゑ情ゑ見も其所ゑ入てハいばきの本ゑ〳〵中走れぞゑ枝を

ゑ〳〵き本ゑ〳〵て〳〵ゑ〳〵ゑ筆木の名を負る乙乙て

はあゑゑハ坂地ゑ〳〵ゑ法林ゑ著撰ゑ天を利ゑ中く

或人かくうけるに一ときせず受領ふ　こゝに山水谷のとゝく半宵しふ
ひとつの巨樹あり若しこれを殺丈なく上るの石積よりさみ立くさ
又池あり　たゝなら並て樹うるをあり樹うれん谷とあてゝ小祠と
たてくあるこれを祭れり本とゝてこれ半ばさだらすゝど
兼好法師庵　清系山水其遺跡あり　しふん敷紙翁集云本巻の作坂ふ
猿猴堂　音俊通まる　通りて今又通て猿屋敷堂と称もあり　敷紙堂
通りて今三州の者誰て
籐倉街道　今藤倉を経く　秀源山　坂ふ　坂ふ　長駄馬ふ
て復通ふ中古遠山氏と号て者あり　濃州遠山の荘を領し
時藤倉将軍の代うれを此道より籐倉へ通し又甲州武田氏乃
を経く河を渡て
法列稲沼水入るなり

馬籠（信濃）

妻籠より二里　駅中南北三町

其邸民居山中に散在に

皂鵰巖　駅の西山上ふあり其狂皂鵰の岩水集るなり

下阪川　故水名　駅中水流湯船沢水川なり　笑二州ふ嘶なり

諏訪祠　熊野権現祠　倶水駅中

永昌寺　臨済宗西法山と号に　あり　縁侍長福寺水属を

丸山城趾　駅の西小あり丸山城趾に又駅の南小岩山とゝあり　敵と
籠水三の砦と築く　合戦場　本巻家慶水云籠城戦家村西堂の田畑
くこれその一なり

破横路　馬籠村より東本巻路し　横路まで北一里が間れ南へ流ふ
千載　杜子庵や本巻此けちの丸本橋ふを見る後水藤乃庵此れ　空仁法師
新勅　本賊うれきその河さ此袖ぬとてみうめ病も和と薬危　寂蓮法師
拾遺　中くふいひもうおて伝法子新本巻病の橋此けうもふ神　源頼光
後撰拾遺　山もひもうふ岩の指孤今もて水くちの苑山此本巻此けに　後白河院宮内卿
後撰拾遺　分て此本巻の橋たえくふ行を為路うに此筆去去〳〵雲　後赤染衛門
新後撰拾遺　雲もるとて下に立ふ分けに此のけうふ今見に本巻の安ふち　源頼実
新後拾遺　ふ行も程本巻病の橋此けあ平に此ふてや月のを後ら為　左大臣
玄集　ふ此月のうけ小ヒて行る山人のいて清るあとれ峯のうけ〳〵　頓阿
本曾川　御岳の方小流る大河みて川中の石　従二位
大木　大〳〵〳〵して紅ふ〳〵紅　行家卿
見せもやおいう行法の本巻橋の春ま思ひの深さ行うと

馬籠より
妻籠へ五里

馬籠
宿

石くれの
棧道
有

淺間嶺偽秦丁力
棧道斜通驛亭前
峯去絶巒潛噴霧
樹依鶴廻注霜天
蟋眉ふ拂分軍夕
驥足欲馳隨澤牽
埜老何閑尚日事
乘蘿一曲隔風煙

寶山　畑惟龍

信濃 妻籠

三留野より妻籠駅中南北三町相對して巷成なり其傍を山間に民居多し本街道を安曇郡なり孤を作る

を山間にて階坂多くれば いつゝへを科野と書んは國東へ上野

南へ甲斐遠江三河小巻越後越中飛騨西を美濃へ凡八ヶ國

に隣る國の長さ東を碓井峠より西を美濃境迄 道程四十七里 餘なり

本街道山中 谷中 田畑まれにして村里少し 茅葺大屋多く

松杉 屋根は石を壓石 其他山中に茅葺なく しかして板葺多し

少し亡 風を防ぐ 柿 宅 素朴

寒 基しかれども 藪 極強なり 信濃は竹を用ひ

用ひも 籠中 柳の籠は本紙用ひ 他國にて竹を用ひ 多は竹を

乳 樹 金 橋本 絲本 ふし 寒 素 他國より 黑 其他 又 蚕 板

熟し 山中は樣花多し 桃 梅 三月末 頃 一時

花 國 又は國 樹 松 桃 梅 三月末 頃 一時

松 あり くれを 業 松 あり 雄

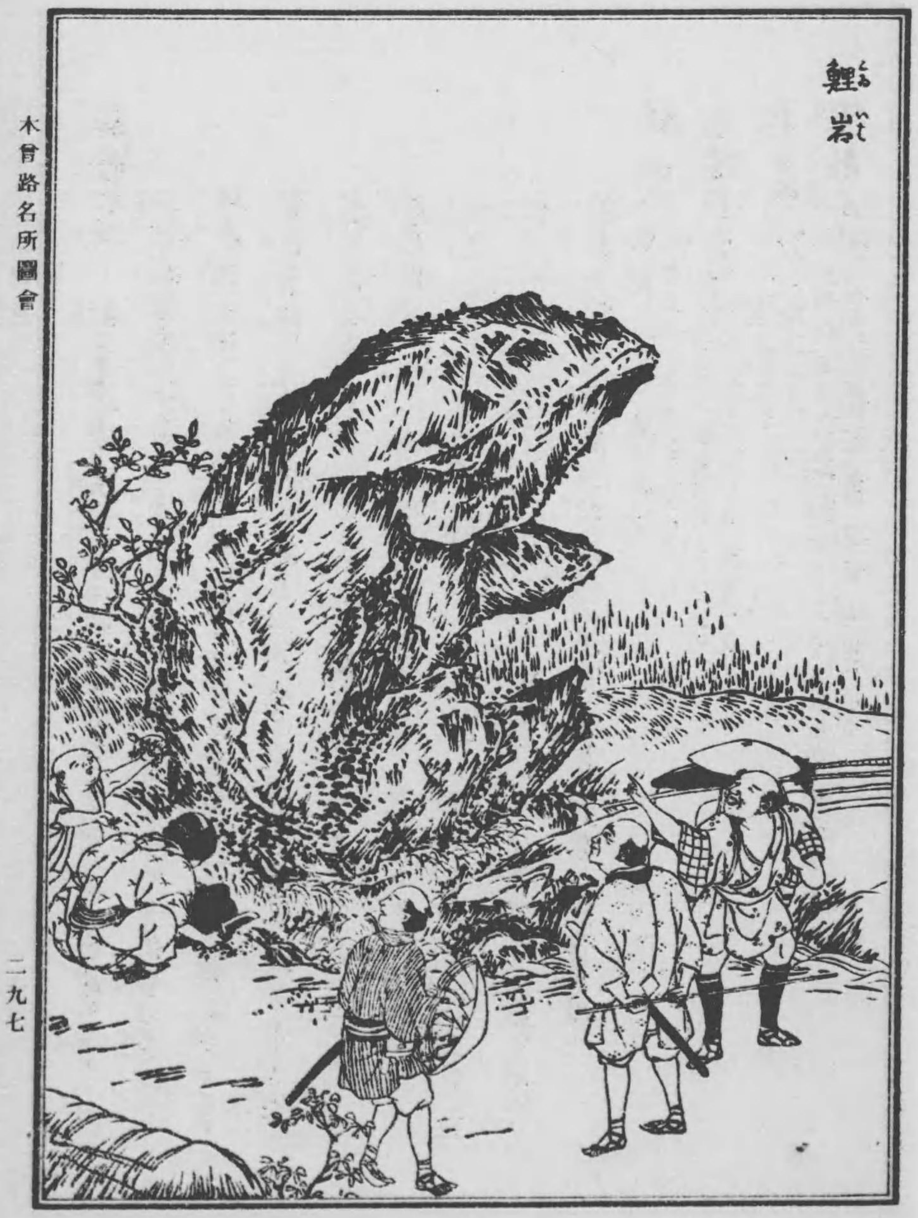
雌雄瀑布 駅の南 の側 は あり 雄

大妻籠 駅の南 上 流 蘭 川 は 流 ふ

牛頭天王 駅中にあり一村 生上神 其外 神明 祠

駅宮の祠 八王子祠 俱に村 氏 多

鯉岩



妻籠古城　駅の東にあり城趾現在なり天正十年本曾義昌之祥を紫して山村良勝城してこゝに居しむ同十二年秀吉公本曾義昌を命じ伊奈路を禦く義昌兵城良勝小幡して妻籠城を守る時小笠原信濃守郡主菅沼小大膳諏訪保科甲兵を合せ本曾と絶交んと欲し本蘭の砦を拔く妻籠城を攻る良勝士卒を命じて鳥筒を放ちこれを防ぐ伊奈軍勢ろ支を得ず退ひく遠巻ゝく且水道を断城中水無して白米をそゝ向く馬糞流し欺これを見て城中に水沢山あり城壁して拔屋かゝりとて軍を退けく伊奈はゝ帰る良勝伏兵を設けて之を討り士卒死亡を着ゝ菅沼大膳敗走し世ゝ良勝の功績実に

鯉巖　妻籠の小名にあり

烏帽子巖　形似の所の小名俗神戸ふあり

兜巖　右ふ清水ふこれも

風越山　坂田の西にあり妻籠に入る伊奈を遮ふ所ゝ云

千載　風あゝ吹ゆゝこゝ吹ゝれゝ時者御り世を住ふの庵小吟ゝる家　信輔

詞花　風越の峯ゝ吹ゝ見て見る時ゝ者ゝ吹ゝれ抱ゝ者ゝあゝ乃ゝ　茂永家経

夫木　手向ゝ山もゝ見ゝゝゆゝ千風紙の色ゝ者ゝ尾花穂小野小竜　源頼仲

新六　こゝ小て拔ゝ月を見ゝ吹ゝ者ゝ風紙のこゝ　為家

千載　さゝて色ゝ吹ゝの葉ゝ吹ゝ見ゝ者ゝ風ゝ山峯　公経

古本曾嶺　坂田界ふあり

捻樹澤　坂田ふあり

元亨二年三月十三日　中ゝ古嶽六七箇あり天正十二年

貳こ社を撤しく　伊奈軍妻籠城を攻る兵士卒死亡数し

其時の鎧紋の瓦ゝ

聖屋中で二里半駅中南北二町好を相對して巷城ふ本曾路ゝ

みゝ山中なゝ名ゝ山ゝ原山谷ふく峠ゝ山ゝ路ゝ

三留野の信濃

桃中三留野ゝ聖屋中での間ゝ紅ゝ者ゝ遺ゝ山間ゝ者ゝ数十間

流ゝ本名川ゝ路の狭ゝ所ゝ本を城ゝ〜く並べ為ゝ〜ゝく

二富豊ろ
豊尻まて
ろく嶮
路し
懐道
多し
彩絵裕
雲もかな
下に立る
くけ〜の
けるふ
本当の
ひとち
源頼朝

いかそ
本曾路の
秋
長福
尾金

かゝる所道狹きを補ふ為に山より屏風狀をなしてそびえ立て其中より奈大巖ちり出く路を遮ぎ此ゆ撰乃者ゝいづまも川の上にかけ渡ふ橋あり後世に絶てなきものなりけり橋あり他國ふも名ようなるかけし柳ありと山の尾濤狀をなして岩にへへまく先の山出尾濤狀まる所者ゝ其岩道ふ撰ひて溪川の流を本者川ふ落合所者ゝこれふゝふ橋ありれば中ゝ甚しく間ふ中掘ゝ所有其向ひふ姙友ゝ所も有り其所ゝ大岩あり吳系なわ

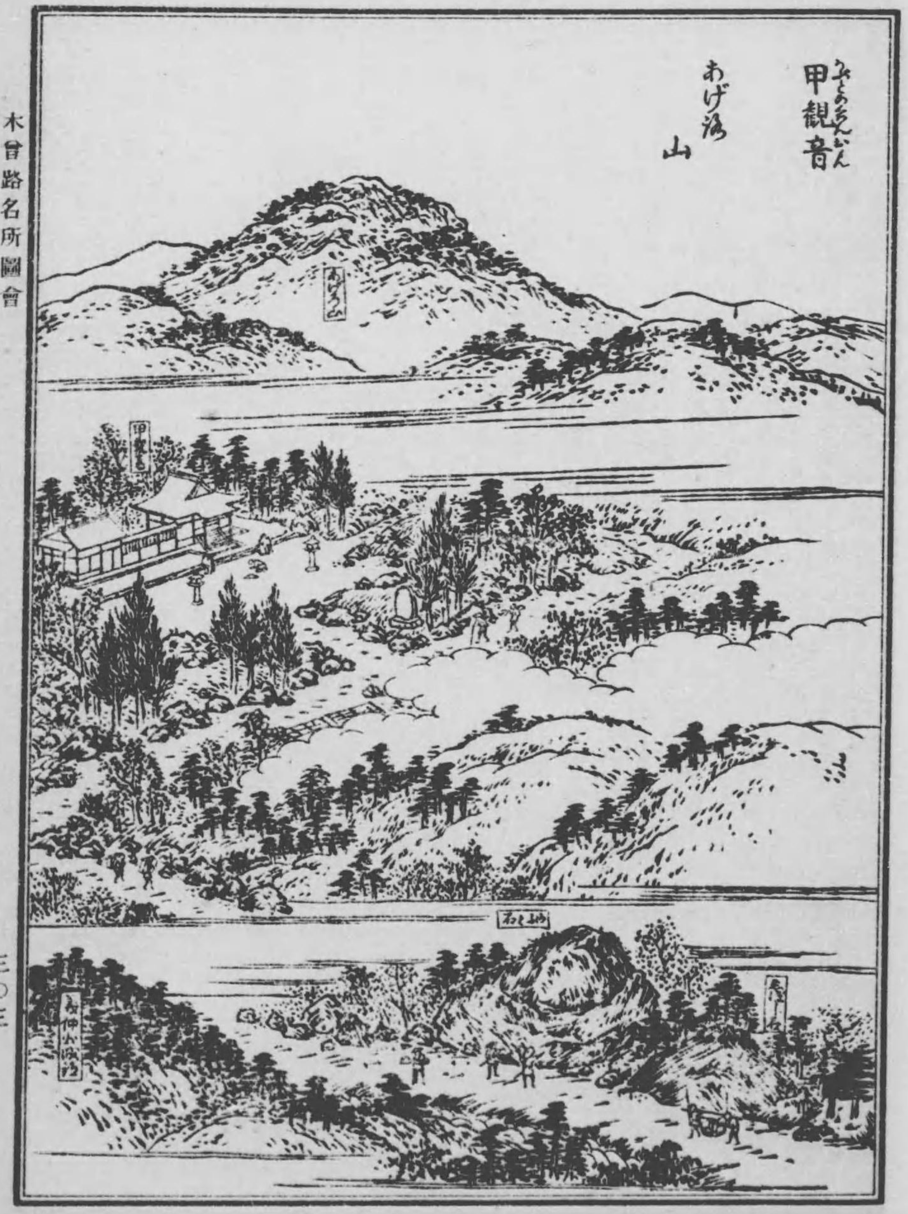
圓原生の碑　神戸の東にあり天明三年これを建ふ碑銘辺さゝれそのなれハまくゝ暑れ

牧　牧澤橋　撰川戸橋　羅天橋　いづれも橋橋

伊勢山　駅の西ふあり昔を問ひし里諺ふ天正十年

奈岐嶽　駅の東にあり又一名峰比者ゝ山ふ入く本と伐ふ山ふ嶽と称ふ

揚麓山　神戸の西ふあり中央ふあれを中ふ比者ゝ岳と称ふ揚麓村あり其上方をゝ山ふ怪嶽人登ゝ即ち奈岐者岳と称ふ揚麓村あり其上方ふ夏まんゝ雪の迫れ所ふ窟あり中



慶さ拾十歩其内に方弐三丈の平石あり之を称して所謂山姥の謡曲に産をあげ湯の番をせし山姥とは是なり

牛頭天王祠　住吉祠　白山権現祠　若宮祠　剣祠　熊野権現祠

偶ま三家聖ふ

等覚寺　三蓋聖ふあり曹洞宗日晃山と号し信州松本全久院に属し大雲和尚を開創とし神戸の飯嶋と村を馬頭観音安置村民番火を接ぐむかしし本尊義昌永樂年三百貫文を寄附を今ふ護狀有て是を蔵む

観音堂

岩戸観音　この岩上の窟中に千手の像を安置し

名産和合酒　清水酒味美を以て聖もとし

三富野邸　駅のあふ一の阜山あり嘗て武田氏六世の孫兵庫助家教其子又を郎家村遠武平中将軍尊氏ふ属し一戦功有て家と起し列侯に

本曾古道　信州赤坂の駅より高山福島坂本ふ牧野上細田久田見蜂川を信州境ふ変易しる所ふ

是其古道なりいづれの代ふ三富野より三留野ふ出る

三留野より宿ふ入る　坂羅天坂をこえて清水村ふ入る山間世間許あり宿ふ中橋村ふて尾張の農家に至り十二橋村

より駒ヶ嶽鮮ふ見ゆ此時雪紙峯に戴きて風色斜なるべし

坂をこえて芝山下左家より蟹屋の駅ふ入る

須原まで三里三十町此駅いふ〳〵聖跡里史書に駅中東西五町俗相対して巷説ふ其俗山間ふ散在に

信濃野尻

飯盛山駅のあふ有り河を隔て

本曾大河　三蓋聖の東より流て紙面に上松ふ入る水流奔騰して其聲雷霆のごとし大雨の時水漲りて畏るべし

牛頭天王　鹿島祠　白山権現祠　住吉祠　諏訪祠　俱ふ村民ふ

妙覚寺　中山道須原定勝寺ふ属し宗法雲山と号に

野路里右馬助家益家　寺長と称る姓也本曾左糸右丈家三ふ分れ其ふ絶今

貢城の文書に曾ふ家ふ蔵む　文禄元年豊太閤検地の時石田備

本戸彦左衛門致春　慶長年中山村良勝の軍に従ふ本戸ふあり氏とし

太刀一柄あり長サ三尺三寸許拵光て奇偉なり

野路里館駅の南に有り今城山と云ふ昔時古墳一塚を鑿得る者あり

長野東山道の中にあり駅次に非ざれども古蹟の趣あり

民居郷を隔て山に倚て経居せり

今井四郎兼平城長野村の南に有り今俗と云ふ山頂に城址あり

其麓に古国門の址あり里人これを国山と呼ぶ北越へ出る合戦場なりと云ふ

多義仲兵を起し東に北越を伐ぐと見へたり

其須て小国を設く英雄を偲ぶ的場の遺址あり本曽家

木曽殿館長野村に下馬及び殿的場の遺址あり本曽家

に居れ此邑古陵数基あり里人云本曽殿に其後こゝに義仲に至て滅亡

絃ども其痕と云へり支を考へば又一岩あり幕岩と云里民云本曽殿

花城安らの

地なり

弓矢八幡宮弓矢村に有り本曽

家村に建る

貴船祠俱に祠官古尾氏と雑を掌る天正十八年

十月廿日石川兵部老吉神田を寄進に

出雲明神祠其頃村民これを紀る本曽殿これを奥る例祭八月十五日

阿弥陀堂出雲の祠の隣に有り弥陀の

丈六坐像安置に幸地仏

天長院長野の小字中の隣に有り禄久と号に須原定勝寺に属に古へ

跡なり裏言宗中世より禄宗と云ふ什宝に太刀銘吉光六百巻有

永平八年の文字有

雑財天森本吉川の中にあり

阿満橋橋伊奈川に架し長七間半

磐出観音伊奈川村の上に有り幸子に属に

拠聖尼の宿址こゝに本吉の大河を見る長野村の天長

院に請て中仏の岩上に休て雑天を遥拝し弓矢村の古

関門と見て桜を植られ此間の坂嶮しく平沢も田中も城

跡なり大洞村の今井四郎が城址を見端村より伊奈川橋

こゝに須原の駅に泊る

上松まで三里九町東山道駅次なり東西四所谷に対して巷と

須原（信濃）

なん土産絲綿此邑に諸村蠶に養人幸多し

伊奈川橋三重中間大水に流れ最壮観なり後に石を畳く農に

緒先十六間ゑん

浄戒山定勝禅寺須原の西口に有り陸奥宗

絲吟坊山寺に属に

兼平
羅城

本尊釋迦佛 鳳山香林和尚本曾義仲十一代の孫本名右京亮義親豊の本称之法名を定勝寺殿と号す

十王堂 境内にあり

鐘楼 境内にあり

鐘銘曰

山色登楼詩興濃千鈞大器響珍重
群生試聽斜窓曉醒夢聲聲百八鐘

天文十八癸酉王林聖賁誌

逸牟住持慧章其鐘の破壊を補ふ大徒孤渡ふ

涅槃像一幅 什物

寺伝云天正十年本多義昌濃州をうけんとし義昌が稚子愛丸軍ふ之を敗亡ふ足と古稚ふ寺本寄附し其画大幅まふ

董思恭画釋迦文殊普賢の像 三幅

唐画墨梅一幅 懷愷寺

唐画出山釋迦 蓬仙人

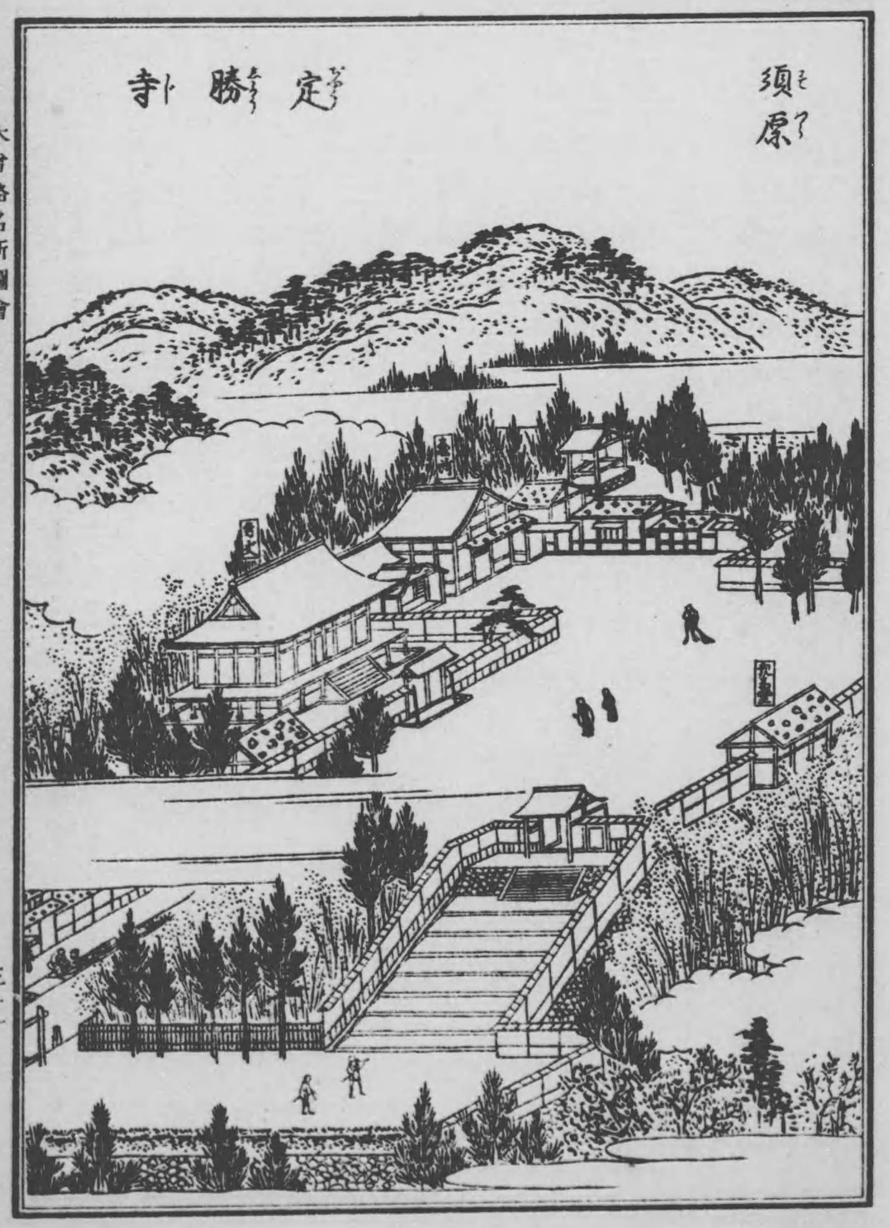
唐画漢樵問答の図一幅 鍾馗 父の解の図

古画龍虎二幅

左京太夫親豊之肖像 右京太夫義元之肖像

太鼓 其他尚多し

須原 定勝寺



左京大夫親豊墓　寺内にあり墓上に大樹の接あり　其圖を載せず

鹿島　祠　祠宮玉置氏

須原を出て小沢村〜大関村あり本谷川に大関あり其流さ
半ばなれど松山〜本山〜大関村あり本谷川に大関あり其流さ
番場村〜にも溪川の橋あり清蔵倉平三郎あり荻原にいる
立場なり宮の堂村〜かゝら村を過ぎ荻原にいる

小野瀧　小野村の右の路傍にあり
高三丈許直下に本谷川に落る
此瀑布泉を山澗より巖を伝ひ只管流れ落ち世界かゞやく落ち
傍に石像の不動尊ゆゑに細川玄旨の老の本谷越しの山純粉
小本谷の路の小聖滝より巨布引鮮面なれども毋さくとゝあ
やまを成これ往の絶乃此國の奇松あり〜小そしる巨岩やと書
ゑ〜なり真に雲霧く素練掛されば小噴びく明珠と敬に
こゝ此所の半ばゝ〜

小荻川橋　本谷川に橋あり長十五間南北に流れ本谷
寝覚山臨川寺　寝覚に小あり深淵流れ特に小意流なり
本尊釋迦佛　開山法山和尚
辨財天祠　方丈の東にあり尾州分四代
木曾八景　寝覚夜雨　覚院殿　飛市建立
小野瀑布　駒嶽夕照　御嶽暮雪　桟道朝霞　德音晩鐘　衝川秋月　風越晴嵐
各詩あり　福島関甲山氏良由作

寝覚林　尾州の家臣
寝覚の原を臨川寺の茶敷のうさゝ岩間を洗ひてゝぶ
みちのゝ其道なれば〜福さ苑の原を本谷川の汀
あり大岩あり〜く撲ち十間長四十間をゝ有こい本谷川
いと狭き所なれば瀧形〜てゝふぶ水のさ風間もゝぶめく
地を深さもけゝがゝ〜そは福ゝめ苑原ゝいとく大なる

とゝ小野の瀧

家集
山ちゝ
突初し
ゝ
久ゝの
雲井ふ
ゝゆる
滝水
ゝ系
中務親王

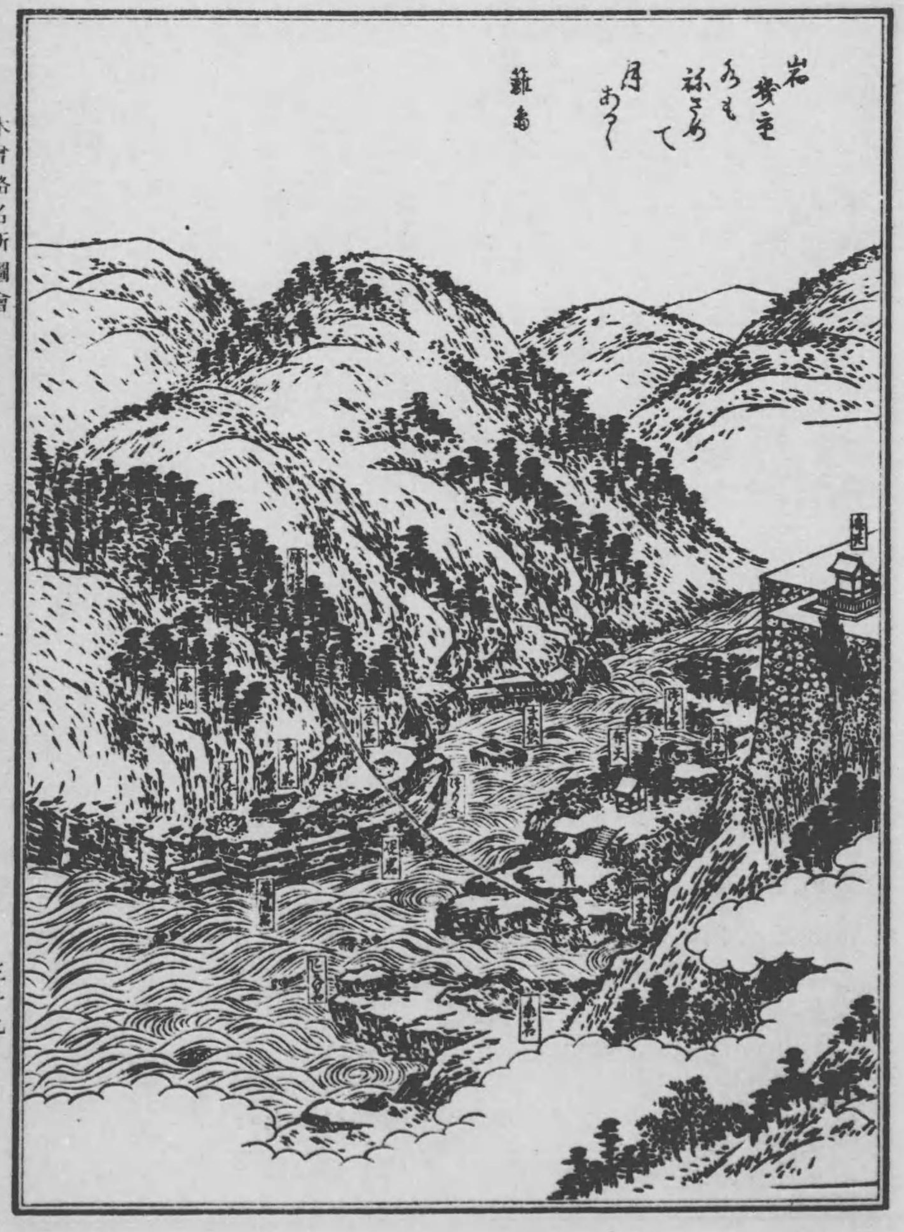
巖あて河ふ隔めり高低とこ為あり片やうに岩洞数ヶ所
聳天を畢き平なる所にて広く家とらん其岩間のわくあるもん
幾許空にて人を走らしむ其うへ平なる又低くれて河水の中う
あて大石あり水行くべき為に本若川流るる渡瀬の家也大巖の為の
方本若川よりのぞみて石岩屏風を立てるがごとく向ひも
大巖あり為岸の間あれども狭にて二間あるひは三間頗あり
山賊を綱をわたして此河を通ふと為に岩の　下の前長八十間
許あり上の水面蔵口の岩を上鷹岩中ほどに河中に板石として一つの
石有川むひの大岩のうへに三つれ宛あり一の大なる様大釜とふ二の
ふたつとふ釜とうへむひふ屏風岩とて屏風を立てるごとくある
其下為たるに岩として畳ねたるごとく外岩あり又高ぎ岩として鳶帽
子為仰ぐる岩あり其前為河のこと為ぎ為平岩あり其うへ為魏岩有平岩
のうへふ蕗岩有其黒岩屏象岩とふ又川むひの岩山為檜椒梅松

など為げたるくう敷たる九氏地を他物の勝まさる風景にもこえく
奇妙の風色なりいけしを弗九年　如ふ為ぎ云繁為も述べし
こふ奮浦為ぶ為弘きれ一面とふ偽説あり浦為ぶ幸い日幸紀
雄畧帝の條又為枝桑畧記為見へられども氏地ふ至り一変い見へど
されば為は本若為道中の名所あり此街道弘ふ人まげこふ
三奇ざ所為為飛雲とふ謡曲ず本若れ山中ふく三熊聖ん
山伏あ中九そのふ違ひる事弘地まり嶮る事ふ見へざ拠い法ば
ぜ一といひふぶ先為一奇勝あべ

なふ所の為為為為弘為弘屋の家と雅名はらん　近衛桜政
山里為孫さ免の家乃さひふ為ふ弘為ふ為ふ為ふ為ふ　紫燕公
岩の松和九為波ならわ旅の孫さあれ家於さひ　幽南
　　　

臨川寺

寝覚の床



獸類皮店 本谷の山中に在り
東子 ま〜

はべり彩繪はなはだ小藝の皮革猫の皮貂鼠の毛ひあるひは鼠の
爪百ありて牧牙など多く出でくる物を清水店所にあり此毫
獺所用と多と是特獲くられと製〜ちゝふ出たるゆきうふ人
これ試求く本谷の名産とし鼠毫六雄將軍の號も生〜しく
多くの革店ありけるもまた表ふ品
觀音堂 駅中にあり天正年中土民田畝耕〜て網掾畝得る一老と
建く今は秀光れ
阿弥陀堂 殺原の支持右脇ふ阿弥陀佛の画像を安置し信云
觀音聖人 第二世如信上人の画も所所
氣比祠 鹿島祠 神明祠 倶本上松乃祠宮 德原氏祭祀
三飯廻翁閑居 三飯村ふあり 此人中ゆ〜弘治年中此人ふ〜て世業を厭ひ
此本谷の山中に居〜く不老の藥試人ふ与人其須の名醫なり
あ〜れ〜と山中奥深く入く草を拾これを製〜く藥味を調ふ
世と三帰やう〜人語曲ふも此人を出せり良方の名學ふ〜と義ふ英ん

○和極集上下 ○新撰之方 ○小兒諸門
○當流大成捷徑慶印可集
○啓迪菴日用灸法 ○治肺氣通藥之部
○諸藥勢揃藥組之方并諸療
○當流依門下學主懇求 ○辨證配劑

合九巻

弘治第二丙辰十一月十九日夜組之

信濃 上松

渴渇まで二里半駅中南小丘町相接〜て巷試ふ其條山
間小散生〜て住居ふ此駅都會の地ふ〜く商人多〜繁昌ふ
地ふり駅の小ふ彩家左ふ〜ある後武三家ふり蔵俳を蓄ふて
名物〜ふ
木曾桟書跡駅路の中にあり〜へ乙跡隠れ〜て結人ふ若む
慶安元年尾州敬君ふり有司ふ命じて桟道試
然に長五十六間横幅三間に天文寛保年中門郷君ふと
有司ふ命じて左右ふ石垣を数十丈築上桟左と陳ん

上松
福島の間ふ
桟乃の旧跡
ある
ひろい上の
山ま御園
なりて
桟道ハ須ゝく
はるゞゝつゞせし
後世今のめぐりわを後て
橋も短く險さてを
かゝ

ひけゝや
傘と
蓋ゝ

岐阻山行
岐阻從來嶮
關門陸尼不
管近無原
巖連棧道
懸空虎峽
急瀨声轟
谷響吉木

千峰十龍日月深山
一路隔乾坤一展驚
慶夏雲端雪踏嶽
中天冷可掬 南郭

今世素盞嗚尊を祀る社を殺許藤とゝゝ長橋三間許斬壱さ
夏かゝ藤下の石ふ落あり

此石垣慶安元戊子年六月良辰

成就焉畢

又寛保元年辛酉十月吉辰

御嶽川 縄掛の下にあの方ゝゝ駒ふ大なる川流れ出る谷あり義経ふ
御ぶけふ本曽の御嶽ゝゝ其谷の奥ふ良材駿ゝ縄掛ゝゝ其渓
の川上ゝ十里許あり此河の流ふて材木多く出る此河上の方ふ
本曽ゝ御ぶけゝく駒が嶽ゝゝ高き山ゝゝ西北ふあゝれゝ
はゝふ雲ゝ山ゝゝ予さ月の末に通ゝゝふ雪多ゝ富士
渓間ふもゝ縄ゝ渓ゝ河の辺ゝ道の右ふ御岳の名峰あり本渓川
を御ぶけ川彩合ゝれを合渡と名ゝ此所ゝゝ御嶽見ゝそれ縄襲の
山中に材木ゝ半ゝ出ふ檜椹松模槻多ゝ杉ふゝ
樫ゝ手ゝして多ふ流ふ此川下へ流ゝ半ゝゝ御ぶけふ

真木特ふ多ゝ又山中ふも道の側ふ梅の木多ゝ大樹あり栗ゝ朴
の木に似ゝゝ桜ゝ桜ゝゝ桜ゝゝ桜ゝ

一本堂下（御堂）せんどうこうふく寺よりさろ素石熱田へ下る数間の中西の方に白毫ゝゝ私の先祖より其地ゝゝ高人罪取法師（奥州に奉行武人佐ひ小藤織子居く武車城司る藤織丸所ゝ）

御嶽

本名ゝく流れ本をる宰基こ制禁ゝ武教一本も絶先ゝ

福島（信濃）

福島駅谷川の上西南十里許小あり神事あり為奥小垂ゝ

御嶽鳥居駅湯舟井村あり石造の鳥居

本曽大河

此岩石崔嵬ゝゝ高下ゝ岩て流没せゝ

御室

名は歩く流石とゝ伝云高倉の王子孫大将軍義仲兵を起ゝ平氏を討くゝ小ふ居る木曽義仲兵を還倉の宮ゝゝ

単衣

ゝかの居倉の王子孫大将軍義仲法皇を奉ゝ

義仲

義仲法皇ゝ

帝と

帝と共に入平賊西海ゝ

城を焼く

城を焼く城ゝ義仲没後王子本名のゝ中ゝ

屋ゝ

屋ゝ其遺孫あるゝん

宮越まで一里半駅中東西七町ゝ対ゝて巷城ゝん其後ゝ間

木敷主に本名若中第一の豊饒の地ゝゝ南駅京都江戸等

分の地ゝゝ京より江戸迄六十七里福島ゝゝ江戸迄六十八里半ゝ

福島駅の右の方小高所あり武田

福島駅の右の方小高所あり武田

関所

関所

荒井

荒井

萬松山興禪寺

嘉吉年中本名武人信濃の剣建ゝゝ

本尊観音

本尊観音

鐘楼

鐘楼

稲荷祠

稲荷祠

愛宕祠

愛宕祠

義仲墓

義仲墓

什寶

朝日將軍義仲公乃び四天王の肖像　三幅

左手房覺明書　一幅　其外数品あり

南山毎年七月十四日十五日土人根井山に登り彩を積み文字の如くく又大炬火と賀ゝく羊頭に布を巻ゝゝ紅を巻ゝゝ指ゝく寺内ゝゝ

めぐる巻を布引とゝふ巻ゝゝ信遍公の善提ゝゝて盂蘭盆

盆の遺ゝゝなり

龍源山長福寺

駅中にあり陳侍宗京昨妙心寺に属ゝ初本名源を郎豊

什物

の創建開山竺隠和尚境内に釈迦堂法華堂あり

本曽殿の乘鞍　二具

朱漆螺鈿八稍の鹿角其一則金彩梱の紋あり其外馬具ゝあり

福島
關所

義重古城駿の西にあり[illegible]に三軍戍び警也

本曾肥前守義康家譜 左系大文義生のぶなり源氏嫡孫の國司及び甲州武田信玄尾州織田信長と系統二十餘年に及べども考に敗走せし本考の威勢比時盛なり武田信玄術智をむちんく和を講じ永禄八年義康没し年八十二歳

本曾左馬頭義昌家譜 義康の長子なり後伊勢守と号し武田信玄が女を妻とし織田信長と和睦を勝頼と隙ありし信玄後其子勝頼と隙ありし信長と和睦を勝頼これを聞く大小怒り天正十年典厩信豊を討ち勝頼今福筑前守を殺ふ義昌出戰これを撃ち先鋒し信豊駆走を勝頼父子これを怒ふ織田信長父子大軍を率ひ甲州に入り遂に勝頼父子を滅ぼす織田信長と武田十九日信長上諏訪に至り義昌に面謁を信長其功を賞し統摩安曇の二郡を与へ義昌を世々本考に居らしめ天正十八年豊臣秀吉北条氏討平らるるに及び信州諸侯悉く伏して信長下総国へ左遷に及び武田の芦戸に居住し一万石を賜ふ永禄二年三月十三日義昌芦戸に於て卒し其子仙三郎義利孫に信州に流蕩して其家遂に亡ぶ

名産 駒本考の法村馬を牧養し其名駿を受これを毛付駒と至きば稲付に牽く

赤魚 本考の太田川に多し味美なり

黒魚 河の岩間に多し味美なり

河鹿魚 河の岩間より出る長三寸に過ぎず土人云く鳴く其夢

岩茶魚 其味美なり

名製 紙蓄 諸村みな紙を製造し効論福浦に多くこれを製造し其

凍豆腐 凍蒟蒻 諸村最も多くこれを製し

凍糧 山村氏吏小令して紙を製し

諸薬種 本考山中に多く其外紙を製し

諸器物 諸品あり

駒嶽 本考の東嶽なり其高数千仞数峯連続して其一峯の嶽ふ

或記に云く山本神馬あり三季物語に天二の頃織田右近桐甲州を伝伐して軍旗めぐし諸將小旬くわを聞て信州駒嶽に百年来

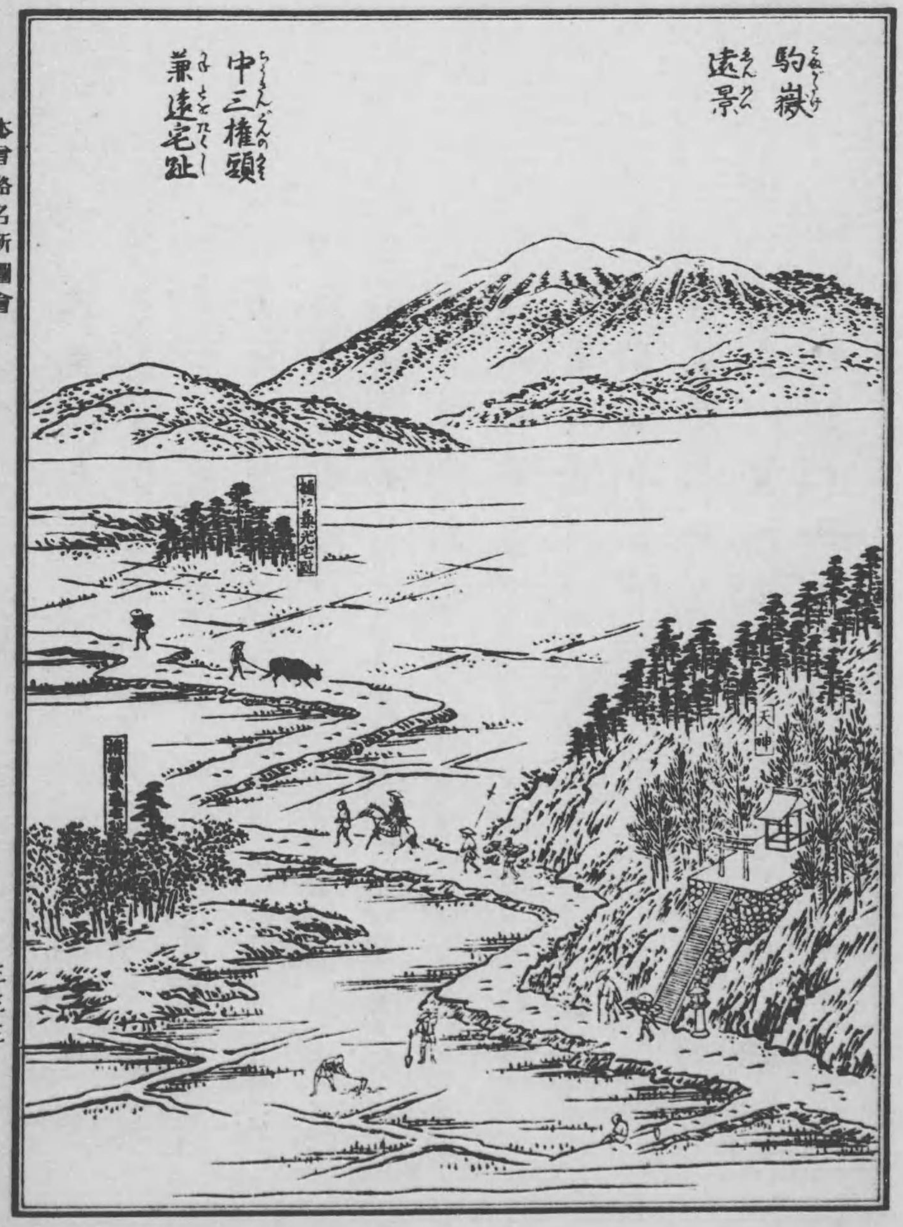
続日本紀云 天平十年八月信濃国献神馬黒身白

髪ノ尾云云

新のぬく旧記あるべし昔奉諸州の軍卒狩集て駒嶽を圍んでこれを狩給
んや思ひむかし此右大将の富士の牧狩ふ倣ひ給へ也 頼朝卿の文度ふ乃ふ
所其年の六月明智光秀が逆小栽ぞ此其事聞て此山ふ三峯あり
三ッの内第一ふ高ひを大嶽といふ格て大山ふり故ふ遠方より鮮ふ見也
ふ曾山の中なり山上の雪六月土用の暑に消て八月ふ又積る駒ヶ嶽の
麓を大原といふ其所ふ川筋あり駒ヶ嶽より流て水かわ駒ヶ嶽れ
山脚上伊奈宮處ふて奥ふ今村といふあり て龍剣山といふ寺あり
寛永の頃飯田藩主服坂長義勝の陣屋ふ止宿あり て殿邑の八幡社森へ
狩ふ出れ駒ヶ嶽と隔て遠く詠ば

尾も走ふ頭も冬〜駒ヶ嶽かんの法ふ雲のくやさよ

中三権守兼遠家駅路上田村の西ふあり今田圃とある其林中に
服坂氏の一ト本あり これを ほんぐ本 と号義仲の元
祖結城氏を ゝ



東鑑治承四年九月七日丙辰源氏木曾冠者義仲主者帶刀先生義賢二男也義賢者久壽二年八月於武藏國大倉館為鎌倉惡源太義平主被討亡于時義仲為三歲嬰兒也乳母夫中三權守兼遠懷之遁于信濃國令養育之成人之今武略稟性征平氏可興家之由有存念而前武衛於石橋已被始合戰之由達遠聞忽相加欲顯素意爰平氏方人有笠原平五頼直者今日相具軍士擬襲木曾木曾方人村山七郎義直并栗田寺別當大法師範覺等聞此事相逢于當國市原決勝負兩方合戰半日已暮然義直窮頗雖伏遣飛脚於木曾之陣告事由仍木曾率大軍競到之處頼直怖其威勢逃亡為城四郎長茂赴越後國云々

兼遠は信州本看の人なり姓は中原故小本看中三とゝよこれより白小笠刀先生源義賢其兄左馬頭義朝と不和なり武尼大蔭谷に在て惡源太義平こ性を殺を義賢幼兒あり駒王とゝふ秦義別當宅盛抱き負て信濃ふ沙兼遠ふ托て兼遠潛に養育して元服をさせ二郎義仲とゝ名を中平家上皇城を羽の野を押攻高倉王義兵を起しぬ附義仲王の令有城更て義兵を挙内兼遠これと輔佐を兼遠ふ三子あり別に次郎樋口二郎兼光今井四郎兼平落合五郎兼行みな本看殿ふ隨從して武名あり又一女あり巴とゝふ頗る勇力なり

峠殿は上田村の民なり峠殿と称し て酒肴を設せざるとなる

殃む村民大ふこれ怪異ふ朝日將軍源義仲てこれ潛殿ーゆ

水精山 駒ヶ岳山人其德を慕ひく其地むーーーーれ精出る又金瀧を掘穴あり今に面く金瀧な坑あり御とく真金よ非に

烽火嶺 木曾川の西岸上ふあり福島の城山と相對す云本曾殿の羅城なり其時行候を以峯に烽火を挙て志を告報ふ名く

野婦池 駒ヶ岳の西ふ小の禁になり池三町許其ほサ圓ふ水あり流よ云むーー大原村の農民ふ女なり系を見れ

百姓ふ嫉に殺所ーとれ見れば髮逆ふ立く顔ふ肉角を生じ其丈大ふ形を出を親宮ふ帰きと父母も怖て

逐出を竟ふ平原に彷徨てある時杖を池の側ふ立く身を投て死を其靈鬼ーーーーる里人時く水面ふ機を藏末

魚ふ多ーーー里人神ふ祀て早の時雨を祈ふ霊ーー今ふ玉川て池

矸犬谷 原犬軍ふく村ふ石壁の下に棲ふ犬を殺て原を追人あるとき

里人時くこと以用着

斬蛇潭 本曾川西岸ふ高ふ相傳ふむーーー農丈あり以泥小州を荷く

怒ーーさ起く見て大蛇ねよ隠んで屋敷と孫ひを

其地を斬蛇の側ふ其を探とく

明星巖 本曾川の西岸上ふ屏ふ忽時ふ奥ふ

そのこれ以見て共農丈孫と惑めくふ孫に傳ふ蛇を

ーて教丈遠近ふ頭注ふ

宮腰 信濃

萩原まで二里又宮越ふ書ふ駅中東西ふ町半相對

ーて巷を形と其條ふ間ふ敷年ふ

正八幡宮 里人云本曾義仲ふ神ふ祀ーて元服をとふ

南宮祠 此一村生云神仲の靈を祭ふ所なりーーーー

德音寺 本曾義仲の牌を藏む同巷朝日將軍本曾義仲宣ふ

公丈長土と書ふ

本曾義仲城 本曾義仲及び樋口義光今井義平巴像三幅あり

燒肉ふ業作堂十王堂あり里人其地と

宮系と云

家系云 清和天皇七代の孫六條判官爲義三男常刀先生義賢武

義國大藏谷の館ふあり久壽二年八月其兄義朝と不和なり其子

惡源太義平ふーて討平ーーむ義賢ふ二子あり其嫡子ふ仲家と

又孫三位頼政書ふくるーふ其次を義仲ふ名を駒王と名

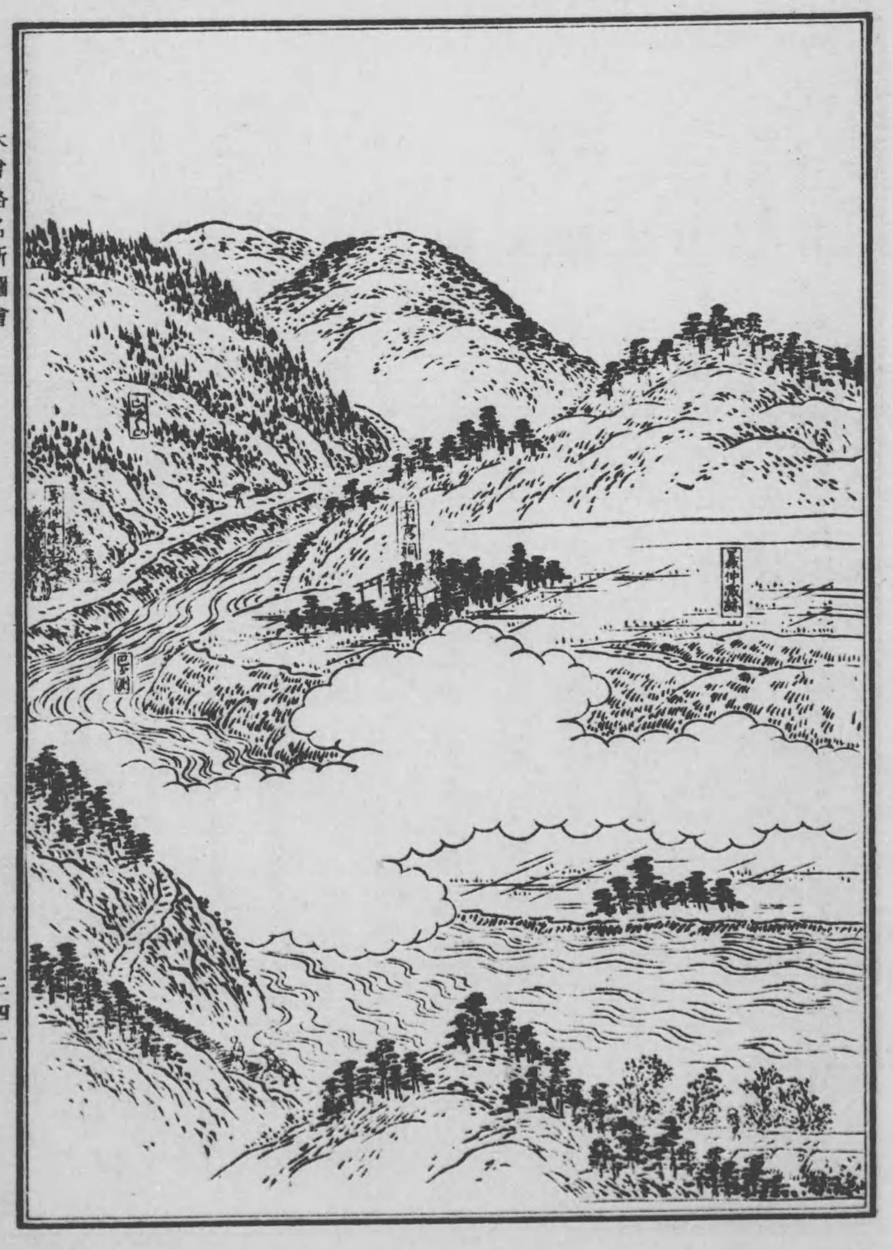
付く父義賢害せーふ同ふ二崇齊藤別當宅盛ふ傅ふ匿ーて傳ふ

に來て中三兼遠に托して養育し鎧を柏原村に築てこれに居しむ仁安元年柏原八幡宮に詣し元服して今の武の八幡宮是なり宮紙木曾二郎義仲と名乗四年平家上皇と島羽の離宮に蟄居ましまし時に源三位頼政が勧ふよりて高倉宮義兵を起し令旨を諸國の源氏に賜ふ義仲令を奉じ兵を擧て寿永元年九月九日越後守長茂を横田川原に合戰して大に敗る長茂逃走して武威益振ふて今井兼平樋口兼光猶親忠根井行親耳目股肱の臣として程なく四天王と称せり二年五月平軍十萬越中礪波山に迎る義仲選ぶ駿て大に之を敗る平軍死る者の七万人殘兵糸魚川に逃帰る義仲北陸道に退て蔵岳に登る七月廿四日上皇敵山に潛幸し義仲供奉し洛に入る〻に其軍兵凡五萬平賊帝を奉じて西海に出奔し義仲父祖の恥を雪む事に不世の功あり八月十六日征夷大將軍に任じ上皇又令て

朝日將軍と号ふ頃朝憲に乖けれこれ先高倉宮害に遭ふ其王子俊〻ぬ〻小國に流落を義仲これを聞て奉じて洛に入即位あらん夏を乞ふ上皇聽容なし安德帝の弟君を〻〻く天子に立んと甚と牽て聽し大に憤怒を含む人あり〻く義仲に潛言す〻上皇兵を起し義仲を討んと欲し義仲大に怒て十一月十九日軍を發し法住寺殿を攻る宮軍大に敗られ公卿命を捨て鷲尾範頼義経の二將を使して義仲を征伐を元暦元年正月廿一日東軍洛に入る義仲粟津原に敗走し流矢に中て首を落く義仲の人となり勇猛なして兵を用る事寡なく〻〻く鞭に勝向に所必勝敗事に〻〻て大功を立一世の雄せり〻〻拙なども不学にして術ふ〻〻誤て大逆に陥ひらる事惜む〻〻

樋口次郎兼光館駅の南ふ有り其大樹多し

中三權守兼遠の長子なり本名殿に属ふく屢戰功あり所謂曰


巴川
義仲歌碑

木曾義仲の古城
徳音寺
八幡宮
巴の墓
徳音寺村

天王の其一なり元暦元年の春義仲の命に従ひ兵を率ひ河内に
赴き十郎藏人を撃ち正月廿二日東軍洛に入る義仲戦ふ兼光帰る
洛に入るんと欲す兵庫頭大に悲しむ遂に東軍に降る向に法住
寺殿に攻る多く官人を殺す其罪赦を蒙らんとして六条河原
において斬罪せらるゝ

今井四郎兼平鈴駅の東にあり
本巻の項に詳なり

兼遠の次男なり兄兼光と同じく義仲に従ひ屢戦功あり四天
王の一人なり元暦の春正月廿一日東軍洛に入る附兼平兵を率て
勢を拒ぐ軍敗れ兼平義仲を東に赴き粟津原に出て奮
戦し主君の戦死を聞く多ち敵軍に多く殺す馬上に自害す
後世其忠を賞す

巴御前 木曾駅の北にあり巴女居る所の邨に祠あり
中三兼遠が女なり義仲妾となり甚勢力あり善戦に長ず

小陸の戦に兵を率ひ特に功ある元暦元年正月廿一日東軍洛に入る
義仲の軍敗るゝ勢固に動く士卒散ずるを惜む残兵僅七騎巴女
其中にあり義仲巴に向て曰戦運今日に尽る死に臨む女子
戦場に在る事恐らくは後嘲なり速に疾く去るべし巴女止む事能
得ざる別に又敵の中へ入る小内四三郎家右と云者大力の士なり
巴女を捕んとして馬と共に巴が髪を持佩刀を抜て戦ひ難し巴女
拳て其肘を打て馬を駆て山路を絶本道に降る其後
右大将頼朝巴女を尋て和田義盛に命じ是を生捕
尼に食に美盛を授て納る後朝比奈三郎泰秀と奉て頗る
勇力を奮ふ世に聞ゆ

山吹山 駅の北にあり土人云巴の
山吹女の居る所なり

平家物語云義仲に二妻あり一に巴一に山吹元暦の合戦に山吹疾
あり系作に止る又源平盛衰記に義仲に三妻あり一に葵一に巴一に

も吾嬬山葵瀧山水弥死二説同じくつゝく或云山吹ゝ舞蔭別當屋
盛が女なりいまゝ其是なる変を志べし

荻曽川　これ本名大河の山中より出る
往還橋　駅碓の中にあり長サ十二間
本を架して橋とす
慶音寺橋　徳音寺門前にあり
長サ十八間
義仲手洗水　宿駅の東道の傍に有り

石碑云　往古木曽義仲公鎮守南宮神社水
御手洗也唱来慶年歴久矣歎之今
新造立石船者也

信濃　藪原

京良井より一里半駅中南北五町許相對して
巷説に其昔山間に散在し
熊野権現祠　別当系の一村生土神と祠官奥田氏
極楽寺　六月十五日　開山法然弟子　妙心寺に属し
和尚　右寺つゝき法然遺

藪原宅　此寺十右衛門上邸中邸下邸等の上今みな田圃
此人ゝ本名義昌の家人なり此邑に居住し藪系なり
五反田橋　長サ十一間　荻曽に注ぐ流れの橋
巣鷹官舎　駅の北にあり毎年本邑諸山に鷹鶻雛を生ずるこれ
府下の鷹匠本邑に来りこれを養ひ馴
土産　駒　葡萄　本邑の諸村みな上供を
名造お六櫛　支藩義系良井の物
此所多し

抑此お六櫛ゝ本邑此山中の名造なりて上間に田圃おびたゝ
多く諸品を製造これを貨て業とし特に近年お六櫛を
名して諸州に高し本ゝ棟梁ゝ木を製し櫛のもとゝ
伊奘諾尊にして神子素盞烏尊熱の川上より奇稲田姫を湯
津の爪櫛を神髻に挿ぬ起り其後欽明天皇詔あり
八品大明神と崇光振匿の霊々ゝ種を蒔り八品とも櫛
爪櫛　挿櫛　扇櫛　解櫛　真櫛　逆櫛
小櫛ホの諸品く　系所後小路大原綱ゝ伊弉諾尊弘系て八品

鳥居峠

御嶽

遠景

義仲

硯水

鳥居峠

駅路坂峠

御嶽の名は信玄公木曽義康と戦合戦あり其後天正十年武田勝頼
より今福筑前守氏大将にて人数八千騎にて攻入り木曽左
馬頭義昌信長公の御方にて七百騎人数にて鳥居峠へ馳向ひ
戦入るゞ木曽勝利を得て甲州勢を追討る夏就書ふんべつ
信長記に武田氏和私欲月くふ宇を年くふ横しくに木曽義昌其外数奉
謀反と企るゆ中暑月十二日信忠卿岐阜より御出陣あり
夜る土田ふ御宿あり十三日高遠十四日岩村ふ御着あり洲河左近
将監毛利河内守水野監物同宗右衛尉る十二日の未明ふ岩村より
信州伊奈ふへ打越四月十四日ふ信州松尾の城主小笠原掃部助味方
ふ奉り忠節を致居さと申城ふ付く園平八森勝蔵若さる所
早手合てて小笠原掃部助左く所く洞を揚てるる飯田城ふ

梅龍ろる伴西星名ゑじも方こく逆仏の體と見及ま抱つぐくやえひろん
其衆則閑元のく慮小森勝義四五里隔陣取くなるこゝゞ氏由坂鼠と
ゑこゝゞ一騎駈ふうけ付退後まてる者ども追討捕頭三百餘信長記
へ進上仁拙勝頼ゑ本曽表ゑ遣中こて今福親兵ゑ巳ゞゑの馬廻
だろう差加へ拙合其勢八千餘騎者居沛表へ差者こゝる二月初旬の須
形まえ張雪浮こゝく谷も峯も平等ゑ成ま一向叫ひゞゑ折ゑるゑれど
今福流者ゑる武者之將ここて本者に〈ぜ働ゑゑる義昌ゞ先勢も鳥居
伴氏者よあて尚産の要害と揉こく居こゝゑ乃ゑゞ今福ゞゑ遣と安く
こゝ早く先ま北者氏由注進こてゑれぞ義昌も安こゝゑ夏ゑこて苗本
久義尚尉中合せ出張ま拙合其勢七千餘騎者長井坂ま喚ま叫んぐゑけこゝ
者居伴ゑて今福と渡ま合ひ眠小合戦小乃ぶ殘雪谷峯に滿く戦場いま
こゝゞやふれをおのぶこゝ割腹もいちゞゑ仏地こて進ふもこんぐる勇士ま
互小者とこゝ辰刻こゝ未時まで者ゞを乃ゞを残をわり切川捲ま河

南風小風こゝを先途ま攻戦こゝ
抑廻こ模様小実こゝ雑あく注者者こゝる今福模様ゑ者く突ま
敗亡こゝれゞ三里ゞ間追討ゑ者こて ぐれ討捕頭の注文宗法の者ゑ跡拙
沛拙小捕有賞備後ゑ笠井笠原小山田左系進其外 寇竟の兵ども五百
七十餘人こゝ其頭共中 將信忠記へ本者義昌こゝ指申乃拙小沛感斜
こゝゞこて使者小美金百兩小袖二重下こ注こゝる義昌へ之沈類こゝ
働の旨沛感の者ゑ巻いされる者要こゝゑ信長記小あゝ注く見ゑゞ

義仲硯水 ゑる居伴小あゝ樋の注 ゑ注面のゞ乃に数系の入口こゝ
ゑ水 ゑ乃ゞ乃こゝ出る巻こゝ十九里ゑ発強小記へ
こゝる支こゝゞ者く半ま玉こゝ注 ゑ遣ハこゝゑゞ瀧泥ゑこて馬に
白伴 雲雀こゝ注く注来ゑとて

信濃 奈良井

塾川まで一里半又猫井こも当ゑ駅中東西七町餘ゑ對て
巷をなん其餘民家散在ゑ氏宿繁昌の地ゑこく本者
駅中の甲こゝ

鎮大明神祠

奈良井の西にふる里巷傳本云元和年中矣
経津主命武甕槌命を祭る
例祭六月二十三日

鍋懸嶺

伊奈郡の東に
伊奈那の郡の境村屋に
絶頂みなく東の方と
高遠の郡に及ぶ天
竜川の流れ眼下にあり
牡鹿の捕し
最要害の所也
奈良井橋

奈良井橋

長十間本とりく
橋梁
甚嶮岨
長サ五丈詳義高の墓國の社
上城下城と
義高の墓

大寶寺

天正年中奈良井に
安和寺
慶傳寺
高天正十八年
義高の創建大
高の墓
義高の墓
義高の墓
義

赤良井沼郡ゟ捕義高館宅址 今詳ならず本岩蔵流伊豆ゟ窓
千村沼郡蔵つ重照宅 信の後ゝ天正十八年卒に傳記詳ならず
千村沼路ゟ豊御の舎弟 ある重照自我ゟ林檎栗の樹
本名義蔵乃び義昌ゟ仕へ 迎頃拓して今絶ゑ古根あり
其後義昌下総国戸ゟ遷ゟ 八郎右衛つ重政の子なり父ゟ
その子弘三郎年若く 武功あり重照領地八千石
遁れ出て去ゟ其ゟ除 家居清貧なれば義昌卒に
今ゟ出ゝく尾州ゟ奉仕 破れなるべし

土産 稗 粟 蕎麦 村田ゟ作る稗粟
鮭 海ゟ流ゟ所ゟ獲ゟ 蕎麦を打く振るに
又諸ゟ年毎ゟ貢ゟ上ゞ 鱒 社も海ゟ流ゟ
上供ゝゝの名産とし 所ゟ長大なるもの三

名造諸器 民居ゟ田圃ゟ諸器を製造して尤繁ゝ四名
ゟ蕃くゝれを向本細工とい 尤も玉堂の作ゟ大室
諏訪明神祠 平沢ゟ里老傳ゟ云 武玉堂の作ゟ大室
義昌武田勝頼を不和ゟ 二年に創建年未詳
攻ゟ居城の合戦ゟ火を 紫累ゟく天正十年未詳
失して年実傳ゟ伝 て典厩信豊ゟ命ゝゟ
社の記方ゟ傳ゟ 大を殺ち祠を焚く 記ゟ亡
建設ゟ神 荒れ舞 例ゟ六月廿二日 所の生ゟ祢ゟん
其外末社多ゝ 神楽 七ケ年目毎ゟ月甲寅の日

平澤村の南に家多し

辛山まて武里いろへふ温泉あり板ふ熟門を

熟川 信濃

名ぢく東山道駅次此所より東江松本領にて西を

本曾谷の間みふ尾列奏の御領なり当駅中東西に所

好桐射して巻江かん最殿阜たり其俗の民居散在

桜澤橋駅のひがしにあり是本曾

西北方六間尾列奏

遠江橋ふ向本渡

番所あり

熟川 駒ケ嶽より流れ其下江屋門より其水西流して松本に

入

捕本澤 俗称宗郷 小野村の界より流れ其水西流して松本に

入

諏訪社 一村は神土神と号す

生土神 真言宗 楊梅山と号す

槻青寺 大同元年郷豪 永昨智禅院ふ属に寺伝傳云

元和二年郷豪 田村将軍剣遊其後年久しく廢

千村氏再建也

鶯着寺 曹洞宗 延梅山と号す

柳籠橋 京より尾張の東路中にあり長サ十間本江架して樂し

熟川四郎家光家 本名横沢の家村の四子なり此駅ふ居住を改先て

三尾氏と称ふ後ふ三尾村ふ属し

千村右馬つ尉佐政家 本名横沢の家村の五子四郎家重上州千村

郷ふ居住し其所を領せり本名義佐政と

其十世の孫佐政

居住を其子右馬つ尉政綱本名義佐に属して此邑江

奥度小通して食邑江武田信玄の書一通小並系奥度の状

長と称ふ其家に武田信玄の書一通小並系奥度の状

二通本名義昌の状

を通を蔵む

荻曽 武居山間ふ数軒

獺諸獣 鹿猪羊熊等 本草江之中ふ記載

荻曽 黒川 木川 西聖王 聖号 孟谷 基多

土産 絲綿 麻 又接骨薬 里人云 一人 胴瀬と捕山者あり接骨

五月日橋 駅路ふあり 長七間

臼の中に入れて杵にて搗くに其形見へず其變さ半紙へ
散ずる後こに蓆ふ又其積ふ長柱にあり之れを其窟物と
恐れて敬て犯さず年々
地渡澤 赤川村に入る地の古墓と云く其れも亦悪しき古へ
村中男女数を知らず地の古墓毎年正月五日本郷を悪祟あり是
と云く男女数を知らず毎年正月五日本郷を悪祟あり是
古代の風なり今は年絶を祀を地渡祭と云て実ふ
西野 本谷村山中にあり涼風居る間は暑せず
地勢寒冷なりて五穀生せず
領主は多く拾村に民居も絶を半分屋別荘の領し
黒澤 本谷乃上中に入る民居山間に数在り
して地多く温暖なる人多く住んで田地あり
御嶽権現 黒沢に入る之れを黒澤の宮と云ふ 本社 若宮の二祠あり 摂社 嶽の南に入る
大橋 本社 若宮の二祠あり 摂社 嶽の南に入る
摂庄至徳二年 本曾伊藤氏信遠営む 若宮 文二十
三年本谷左馬頭義康遠営む 彩殿 六間 横二間 讀経堂 五間 横三間
禮堂 八間 横六間 本社禮堂 八間 横四間 寶蔵 一宇 祭禮例年六月

十二日十三日福島三寺の縁来く大級若経巻を捧ぐ且流鏑馬
三騎あり 新く御嶽へ登んとする者の禁齋七十五日六月十八日
山に登り此祠の實物本谷源長政和福三年六月十三日御嶽
に出る本牌に其姓名を録に本谷義昌欽仏の画板三十六枚を
献じ今其四枚失に武田勝頼の書翰一通其餘古文書多く有
御嶽 上信濃一列の大山なり西野黒澤。赤川王瀧等其禁に有
黒沢に獨奉祀を毎年六月十二日十三日諸人樂舞して
登る全く富士山に登るが如し 絶頂に小祠あり且三ツ池
あり其側巨巖矗々たり四季に雪あり霊境なり
山に登る二四里あり 峯中に拝を賜して峯に社
祠あり金剛童子を安置ふ 懸ひて天明年侍従亀五郎松を
一枝を盃に乳酪の如し これを名づけて御松と云盛夏

大絲

ものゝ山間に積雪あり叫木生せず又三里登れば絶頂に至
二祠あり一は王權現中央にひ一を日權現と云其西の峯に三祠
あり一を俱利迦羅とひ一を八王子とひ一は土祖權現と云
其東の峯に二池あり一つの池を水源と西麓小流る其小は地獄谷と云硫黄多く溪
川あり王滝に下る是硫黄の氣にして其水甚苦
嗅事あり又山上に島あり死鳥のめ〳〵毛丈雌雄のごとく一人を
見ても驚く山上より一草は生ず葉蘆蕪に似て小花咲く狀菫
菜に似おゝ〳〵亀紋紫なり名づけて駒草中央に又一草あり葉に
似て大なり葉軟にして里人採て膾に食す

氷滝岡通王滝に下る滝越に至る路甚隘し絶壁数十仞水流
傍に沿て行く有司用通を造て山路
少人見る事少なし

土産十二島本谷中にみかこれあり飛騨嶺の如し獣類十二と
諸獣鹿猪霊羊多くこれあり
熊皮いまゝへに貴を侵し入る猟獣本谷の名谷これ狐狸の類皮
山神掛子本谷深山にこれあり猫のごとく頭栗尾に
岩戸權現祠王滝上流岩間に祠あり

〜て絶代祠宝傳云是御嶽の別宮なり毎年六月十六日諸人
御嶽に登る時祠官導びて交亀紀正天文弘治永禄等の宝文
あり又御嶽の縁起一巻あり天正二十年三月中旬書て天正
の年号を十九年に改む〳〵御嶽の鳥居あり〳〵罪所謂二十年と暦候あり中世思ひ
原と云

本曾殿墓　三沢ふ里人其名伝ふ所なし本曾殿ゝ子これい本曾左衛門尉義元兆孫の國司を合戦ゝ子ふ終て軍敗まて命伝

頂に即此墓形ゝ子ん如

權守兼遠墓　三澤ふ古石碑婆なれいづまの人知ゝふ墳と為る其由徒詳かゝ子ん

崩越古城　三澤の後れ山下ふあり本曾左衛門義元兆驛軍

三浦山　山本君のふにあゝて王滝ゝ子登り路あり

此山ふ沢ふ御嶽の東ふの麓ゝ子登り三國の界なり

ふて山ふ名ふ為て殿ゝ子ん

又高嶺ふ登まゝ兆濃信三列の界なり標を建て誌と為ふ

山伝下りて八町ふして一橋ゝ子ん乙九猴の貢一なり其下千

澗ゝ子水無澤ゝ子ん又高岩ふ陽む巨巖あり烏帽子岩や

ゝ子これと登まゝに方修験歴ゝ子見へく駿河の富士嶽ゝ子ん

白山ゝふ鮮なり貢六猴ふ至れを澗あり琴沢ゝ子ん又板屋

あゝゝふ縄ふ所あゝ已ふして高嶺ふ登まゝ兆其間の山路ふ伝藏ゝ

て徑を分ゝ樹を架して磴をなん艱難辛苦して貢九猴ふ至ふ此ふ

山高峻を抜むゝゝ地平ふして大道のゆゝゝ伝奥会崖ゝゝ

則御嶽の岬なり其路左ふ兆列ふ属ゝ其上を兆列嶽と云兆羅川

ゝゝふ出る其路の右ふ兆信ふ属して絶子嶽ゝゝ其下ふ瀑布あり

壽を散ふがゆゝ雖ゝ百間激ゝゝ是王滝川の源なり下流ふ本曾の

大河ふ為命ゝ其上の嶺石壁屹立易ゝ激ふこれを登まゝ兆信ふ

界ふ至ふ兆貢一猴ゝゝ貢九猴ふ為る行程拾十里進丈の道ふ

遵ゝゝ下ふ白若ふ至る其西岸即本曾王滝山なり其東の峯

伝中三浦ゝゝ二の板屋なり証ふ舎ゝゝ里人云むゝ三浦ふ至と

ゝ者あゝて岡壑ゝゝ子ん品ん強ゝも寒苦ゝ絶ゝゝ岡茲

兆伝殿越ふ為ゝゝこれゝ白若ゝ至王滝越ふ紙ふ兆百間激より

白若ふ至ゝ行程又十里許山中廣大なり此山中に良材あゝ

梃ホ似たる樹あり葉極く小さく偖これを都賀と云又一種あり葉細
みて背白く出て竹のやゝ雖く裏白梃と云偖これを白比名
と名づく又一種あり細葉あり整さうに見え尾梃と号く
偖て唐檜と云て種白木蔓ホ可なり又一種あり葉細ふして淡
その行り阿羅き木と号く又新羅松乃び五葉松あり蔓梶ホ似く
凋ゝ樹の皮まゝ味ひ苦く偖ふくれと青ぬたと云て其木を伐て薪
とすふゆゑ乾ぶ故ふ能燃ふ雖所獸を追ふく雪ホ侵して山を入
時ハ本と伐く燒火とゝ寒と凌ぐなり樺木なり則市中ハこれ伐
載ハ其皮炬とんこと伐鶴鶏炬と号く蓋これを焼ゝ為ハ入くも
減ハ故ホ稽を焼ふこの炭ハ炬を焼ふくれと聽ゝて漁を為ふ可し
又白樺と名ぢく為ふりの行り其皮重なり為く剥ふれ紙のごく
炬燭ホ可なり又樺の本ハ似たるなの行り皮為く本理あるこれを
水筆とゝ　杖ホ製ゝ又靈書本とゝあり即市中ハ裁ハ

偖ホ色深き号く紫陽ホ似たり整細長ゝ竹のやゝ赤実伐偖ハ
○ハ山ホ小鳥あり東ハ鳶ケ雛と生ハ鶏鶏のやゝ甚ゝ多ゝ又一種鳥乃
軒鶺のごとゝ夜昼五人峰で鳴ふ鳥なり是市中ハ謂猫山鳥なり又
御嶽垂樹の地ホ名乃ゝ軒雛の如ゝ朱冠青趾羽色黒白相間る其名を
鶺と云ハ但ゝ樓を出く雲中にあり人見る事少かり
○三浦を支の宅中三浦山ホなり里老相傳く云和田合戦の時其族多
ホ逃く居ホ其後漸越ホ移ふ今ハ至ハく流越村の百姓ふ三浦氏也
称ハ云伝ハ訛りて三年禍くなり猫三浦の字を書ハ東鑑ホ和田義盛
戦ひ敗ゝて首を授く時一族ふ対九ハ只朝比奈三郎泰秀其後ふ所
城を支ハ泰秀の母ハ巴女なり氏女本名桑遠ゞ女なりゝて泰秀ハ其ホ孫ハ
御ハ云ふ迹居ふるも知れゝゝ流越の百姓桑遠を祀りて地主神
とハ三浦を支の墓中三浦山の中ホあり古樹多く墳ホあり是和田義盛
の族建ふなり迹ゝくふ居とる事明ゝ頗其子孫力なりある時名法圓

洗馬
真福寺
武士の墓
桔梗原
宇万伎
本堂
神閣

義仲馬洗水

小郷より行其里人大岩を脚夫六十人あまり石を拔て推しよせ狂川に是を投て是を丈
其ゝ沉命し肩を案して強く里人大小駄く且大石を拔折ゝ枝ゝ本
若小屋ゝ又馬と負くゝ山を越る事難越事又る物の如の勞力朝比
奈三郎ゝあらばして推うのんちゝゝ吾を支変して難屋うゝ
（一條ゝ領主の有司本若の山中巡檢のありしを
其右若誌を省略し且本ゝ路駅跡ゝ略しのこを
ゝ記載のごとく）

都ゝ落合の駅より山驛まで廿一里あり波義の山路あり崖
路嶮道多く難難辛苦の路中より熨川より柿本村中畑若神
ゝ所平ゝ小橋沢大那本ゝ橋沢ゝ本若路の界ゝ小樵本宵
西ゝ尾別所領東ゝ松本領ゝ上ゝ大極沢の
上ゝ千足原ゝ所あり是本若義仲ゝ馬飼ゝ所
ゝ幾ゝ原ゝ沢ゝ橋あり右ゝ親青堂又岡の森の中ゝ八幡
宮の廟ゝ後ゝ辛ゝ山ゝ下ゝ

本山（信濃）

洗馬まで三十町西の入口ゝ橋あり川ゝ左ゝ流ゝ流ゝ本
若山ゝ流ゝ出ゝ本若ゝ辛若ゝ右ゝ
辛山ゝ観音堂辛山の坂の信列巡礼所廿一番ゝ小沢川を渡ゝ
橋あり（長サ十間）橋ゝ下ゝ大神の鳥居ゝ是を過ゝ人繩
ゝ七ゝて又ゝ新樹繁茂陰ゝ隣たゝ小路ゝ東ゝ西ゝ
宿ゝ家ゝ細ゝ小ゝ村南村ゝ洗馬の駅ゝ

洗馬（信濃）

塩尻まで一里三十町此所より越後高田三十三里
信列河中島へ十一里松代へ十六里
義仲馬洗水 ゝ田ゝ流ゝ洗馬の東にあり
東鑑云 治承四年十月十三日 木曾冠者義仲
尋亡父義賢主之芳躅出信濃國入上
野國仍住人等漸和順之間為俊綱足
利太郎也 雖煩民間不可成恐怖思之

由加下ー知云云

善光寺別道 信濃の里 信濃の国の先陣 菱畑あり 信玄の先陣 押原 信濃 押原 松本

桔梗原 信濃国と隆屋の間 小笠原氏と武田氏 桔梗が原 桔梗が原

平の陣 小笠原氏と武田氏 合戦あり 武田 付信玄方勝軍 武田信玄の嫡子武田太郎 義信甲府を發馬あり 小笠原家と攻亡

武田信玄の嫡子武田太郎 義信甲府を發馬あり 小笠原家と攻亡

太郎 義信 甲府 小笠原 家 攻亡

太郎 義信 甲府 小笠原 家 攻亡

太郎 義信 甲府 小笠原 家

福島
阿禮の
神社

御嶽
冨士峯
遠ふ見
千里
ふくふ
蓬士と
飯盛の
湖

堀尻崗 塩尻と下諏訪の間なり

何某と結投あり出く武佛あり甲州勢と

信州勢も合戦あり

塩尻軍記

武田晴信翌日卯刻小塩尻佛小笠原勢を揚るや敵も拙き

味方に切て入陣形合せ退揚し三里一日あり捨度と欲へ

敵は豆戦を以て味方に長途小勢を其上一騎有好の敵兵小味方佛小

六千騎を以て相戦へど甲兵大小勢を果て世を見くらり給ふ晴信

肩にも疵を受られ漸辛騎りて模へ有り七頭八側して戦ひ甲斐

馬上にて組て高首をとるも多くの人を除あり敵も多くの人を

殺れども晴信自兵騎尾を軍卒騎動し甲斐敵兵を追揚され

足疵四度踏まるるを以て敵軍の中より忠皮獲ると麻毛なる馬小

手にて武者指物を切折を仰驚き駆て騎を乗て

晴信の右の股を突て突所を晴信其侭かの騎乃首級を取

なまじ駆ども倒て手にまた小山田平次左衛門尉馳来り其武

者馬より降小引為し押へて首をとられ敵軍大小

勝を立て熱軍極て敗走し信州の二将小首を着陣せざる内うれしく

実合の集り勢を以て小一手切乃合戦して負死人若干なれ飛ん

ども武捨子に親を顧ず佛と上り小逆進を追詰て討行不貫ども

辛八百七十二級を取晴信の思慮し給ふ小おしも遠て安き敵を追

為し軍勢大小勇あり諸卒務骨以戦中小小山田平次左衛門

働き他小異して則感状を下される

今十九日卯刻信州塩尻魔郡塩尻佛一戦之初頭一ツ討

捕象神妙之至作弥可抽忠信夏肝要也仍如件

天文十七戊申年七月十九日　晴信 朱印

小山田平次左衛門尉へ

晴信に河中島小澤面あれども敵一騎も来られず間て十月十日

甲府小帰陣し給ひる当河中島軍記小云て世に見るべし

淺間祠　嶺ふあり高崎ふ所ふ所ふ所

石馬禪寺……一二六
愛知川……一二九
愛知川……一二九
四十九院……一三〇
高宮川……一三一
高宮……一三一
多賀大社……一三一
不知哉川……一三四
鳥籠山……一三五
石清水八幡宮……一三五
小町塚……一三五
鳥居本……一三九
米原道……一三九
磨針嶺……一三九
彦根山……一三九
千々松原……一三〇
磯崎社……一三〇
筑摩社……一三〇
筑摩野……一三一
且妻里……一三三
長濱……一三三
舍那院……一三三
八幡宮……一三三
竹生島……一三八
琵琶湖……一四二
餘湖海……一四二
番馬……一四三
蓮華寺……一四四
醒井……一四四
日本武尊居寵清水……一五四
十王水……一五五
西行水……一五五
日本武尊腰懸石……一五五
甕石……一五五
蟹石……一五六
明神影向石……一五六
賀茂明神社……一五六
地藏堂……一五六
柏原……一六一
伊吹山……一六一
長尾謙信塚……一六一

卷之二

寢物語里……一六三
和射見野……一六三
車返坂……一六四
今須……一六八
妙應寺……一六八
青坂祠……一六八
親鸞聖人舊跡……一六八
黑血川……一六八
常盤御前墓……一七二
黃鳥滝……一七二
大谷吉隆墓……一七三
關藤川……一七三
不破關古蹟……一七五
戸佐々宮……一七八
月見祠……一七九
不破光治砦……一七九
關ヶ原……一七九
美濃中道……一七九
竹中重治城跡……一七九
首塚……一七九
關原與市屋敷跡……一八〇
天武天皇行宮……一八〇
伊富岐神社……一八〇
班女舊蹟……一八一
野上里……一八一
垂井……一八二
垂井清水……一八二
美濃中山……一八四
不破頓宮……一八六
垂井頓宮……一八六
民安廢寺……一八六
仲山金山彦神社……一九〇
空也上人和歌碑……一九九
養老滝……二〇六
美濃御山……二一一
金蓮寺……二一三
日目土人茶毘塚……二一三
相川……二一四
喪山……二一四
青野原……二一四
幣懸松……二一五
國分寺……二一五
青墓里……二一八
小篠竹塚……二一八
朝長墓……二一八
御勝山……二一八
甲塚……二一八
赤坂……二一八
子安祠……二一九
金生山寶光院……二一九
寢覺里……二一九
杭瀨川……二一九
笠縫里……二二三
呂久川……二二三
後光嚴院小島頓宮……二二三
結神祠……二二五
美江寺……二二五
美江廢寺……二二八
自然居士墳……二二八
名產甜瓜……二二八
谷汲觀音……二二八
糸貫川……二二九
席田……二二九
船木山……二二九
河渡……二二九
河渡川……二二九
乙津寺……二二九
岐阜……二二九
稻葉山城……二二九
稻葉山……二二九
因幡神社……二二九
長柄川……二二九
岩田小野……二二九
加納……二二九
天神社……二二九
往來松……二二九
瑞龍寺……二二九
西部神社……二二九
比奈守神社……二二九
新加納……二二九
飛鳥田神社……二二九
加佐美神社……二二九
御井神社……二二九
各務野……二二九
針綱神社……二二九
村國神社……二二九
鵜沼……二二九
雌子山……二二九
勝山窟觀音……二二九
岐蘇川……二二九
太田……二二九
名造關鍛冶……二二九
名產蜂屋柿……二二九
名產美濃紙……二二九
太田川……二二九
縣主神社……二二九

金山古城……二六八
伏見……二六八
在原行平塚……二六八
鬼首墳……二六八
御嶽……二六八
大寺山願興寺……二六八
泳宮……二七三
和泉式部墓……二七四
鬼窟……二七四
一呑清水……二七四
永保寺……二七四
平巖……二七四
細久手……二七四
月吉日吉里……二七四
琵琶嶺……二七五
母衣岩……二七五
烏帽子岩……二七五
大湫……二七五
竜山……二七五
伊勢參宮又名古屋岐路……二七五
七本松……二七五
西行法師塚……二七五
大井……二七五
花なし山……二八〇
大井橋……二八〇
根津甚平墓……二八〇
坂本……二八〇
八幡宮……二八〇
中津川……二八〇
中川神社……二八一
惠奈神社……二八一
與坂番所……二八一
落合兼行靈社……二八一

卷之三

落合……二八六
落合橋……二八六
十曲嶺……二八六
美濃・信濃國堺……二八六
霧原山……二八六
御坂山古道……二八六
園原……二八六
伏屋里……二八〇
靡木……二九一
兼好法師菴……二九一
鎌倉街道……二九一
馬籠……二九一
皂鳴巖……二九二
下阪川……二九二
諏訪祠……二九二
永昌寺……二九二
丸山城趾……二九二
岐蘇路……二九二
木曾川……二九二
妻籠……二九六
木曾路山中……二九六
雌雄瀑布……二九六
大妻籠……二九六
牛頭天王……二九六
妻籠古城……二九八
鯉巖……二九八
烏帽子巖……二九八
兜巖……二九八
風越山……二九八
古木曾嶺……二九九
捻樹澤……二九九
三富野……二九九
園原生の碑……三〇二
牧・牧澤橋・横川戸橋・羅天橋……三〇二
伊勢山……三〇二
奈岐蘇嶽……三〇二
楊籠山……三〇二
牛頭天王祠……三〇四
等覺寺……三〇四
觀音堂……三〇四
岩戸觀音……三〇四
名産和合酒……三〇四
三富野邸……三〇四
木曾古道……三〇四
野尻……三〇五
飯盛山……三〇五
木曾大河……三〇五
牛頭天王……三〇五
妙覺寺……三〇五
野路里家益家……三〇五
木戸彦左衞門致春……三〇五
野路里館……三〇六
長野……三〇六
今井四郎兼平城……三〇六
木曾殿館……三〇六
弓矢八幡宮……三〇六
貴船祠……三〇六
出雲明神祠……三〇六
天長院……三〇六
辨財天森……三〇七
阿滿橋……三〇七
磐出觀音……三〇七
須原……三〇七
伊奈川橋……三〇七
定勝禪寺……三〇七
鹿鳥祠……三〇七
小野瀧……三一一
なめ川橋……三一一
臨川寺……三一三
寢覺淋……三一三
獸類皮店……三一三
觀音堂……三一〇
阿彌陀堂……三一〇
氣比祠……三一〇
三歸廻翁閑居……三一〇
上松……三一一
木曾棧舊跡……三一一
御嶽川……三一四
御嶽……三一六
御嶽鳥居……三一六
木曾大河……三一六
御室……三一六
福島……三一六
福島關隘……三一七
興禪寺……三一七
長福寺……三一七
義康古城……三一〇
木曾義康家譜……三一〇
木曾義昌家譜……三一〇
名産駒・赤魚・河鹿・岩奈……三一〇
名製瓠蕃……三一一
凍豆腐・凍蒟蒻……三一一
凍糕……三一一
諸藥種・諸器物……三一一
駒嶽……三一一
中三權守兼遠家……三一二
峠殿……三一五
水精山……三一六
烽火嶺……三一六
野婦池……三一六
矸大谷……三一六
斬蛇潭……三一六
明星巖……三一六
宮腰……三一七

正八幡宮……三三七
南宮祠……三三七
德音寺……三三七
木曾義仲城……三三七
樋口次郎兼光館……三三九
今井四郎兼平館……三四二
巴御前第蹟……三四二
山吹山……三四三
荻曾川……三四四
往還橋……三四四
德音寺橋……三四四
義仲手洗水……三四四
藪原……三四四
熊野權現祠……三四四
極樂寺……三四四
藪原宅……三四五
五反田橋……三四五
巢鷺官舍……三四五
土產駒・葡萄……三四五
名造お六櫛……三四五
鳥居嶺……三四六
義仲硯水……三四九
奈良井……三四九
鎭太明神祠……三五〇
鍋懸嶺……三五〇
奈良井橋……三五〇
大寶寺……三五〇
長泉寺……三五〇
奈良井義高館……三五二
千村重照宅……三五二
土產稗・粟・蕎麥……三五二
鮭・鱒……三五二
名造諸器……三五二
諏訪明神祠……三五二
平澤……三五四
贄川……三五四
櫻澤橋……三五四
贄川……三五四
捕木澤……三五四
諏訪社……三五四
觀音寺……三五四
鶯着寺……三五五
押籠橋……三五五
贄川家光家……三五五
千村俊政家……三五五
荻曾……三五五
獵諸獸……三五五
土產絲綿・麻……三五五
接骨藥……三五五
五月日橋……三五六
衣更着明神祠……三五六
奈川……三五六
秀綱澤……三五六
黑川溫泉……三五六
山神祠……三五六
駕疲嶺……三五七
燒棚山……三五七
箕作山……三五七
烽火臺……三五七
小子墳……三五七
地獄澤……三五八
西野……三五八
黑澤……三五八
御嶽權現祠……三五八
御嶽……三五九
氷濡閣道……三六二
土產十一鳥……三六三
諸獸……三六三
熊皮……三六三

山神猫子……三六三
岩戸權現祠……三六三
木曾殿墓……三六四
權守兼遠墓……三六四
崩越古城……三六四
三浦山……三六四
本山……三七一
觀音堂……三七一
洗馬……三七一
義仲馬洗水……三七一
善光寺別道……三七二
桔梗原……三七二
鹽尻……三七三
阿禮神社……三七三
犬飼清水……三七三
鹽尻嶺……三七六
淺間祠……三七八
大岩……三七八

諸國叢書木曾之壹總目錄 終

ㅗㅏ 4G-64

大正五年拾壹月拾五日印刷
大正五年拾壹月廿一日發行

大日本地誌大系第十二冊（非賣品）
諸國叢書本會之壹

日本歷史地理學會校訂

編輯兼發行者　蘆田伊人　東京市小石川區表町百九番地
印刷者　井上源之丞　東京市本所區番場町四番地（東京本所製本）
印刷所　凸版印刷株式會社本所分工場　東京市本所區番場町四番地

發行所　東京市小石川區表町百九番地
大日本地誌大系刊行會
振替口座東京二八七六二番

不許複製

淡